

N O 485 成田空港管制塔占拠 40 周年「開港阻止決戦って何だったのよ、ドキュメント」その1

今年には激動と変革の時代、1968年から50年目の年である。50周年を記念して集会や本の出版が企画されているが、もう一つ、1978年の成田空港管制塔占拠から40周年の年でもある。3月25日には、「三里塚管制塔占拠闘争40年 今こそ新たな世直しを！ 3・25」が御茶ノ水の連合会館で開催される。

この管制塔占拠闘争に関わったH氏が、フェイスブックで『開港阻止決戦って何だったのよ、ドキュメント』と題した連載を掲載中であるが、この連載記事を私のブログに転載させていただくことになった。記事は3回に分けて掲載する予定である。(転載にあたっては、H氏の了解を得ています。)

【開港阻止決戦って何だったのよ、ドキュメント】その1



3.25 集会に向けて、40 年前の出来事を主観主義的な客観性をもって(笑)、振り返ってみます。元ネタ(原稿)は、別の所にかつて書いたものですが、できるだけ短く改変してここに書きます。

題して『開港阻止決戦って何だったのよ、ドキュメント』

みなみなさまのツッコミをお待ちしております。

40 年前、小さな政治党派の週刊機関紙に、こんな書き出しで始まる「声明」が載りました。

+++++

日本人民のみなさん。

いま北総の緑の大地には、春の暖かな微風が吹きわたり、澄み切った青い空が広がっています。四月

二日から飛ぶはずだったジェット機は、影も見せていません。(略)

これほど、素晴らしいことがあるのでしょうか。日本人民のたたかいの歴史のなかで、これほど見事な勝利があったのでしょうか。

皆さん、ともに肩を抱き、腕を取り合って、この勝利を喜び合いたいと思います。

+++++

当時は福田政権でした。かの政権が内政の最優先事項とぶち上げていた「成田空港・年度内開港」は、管制塔占拠という劇的な闘いで打ち砕かれました。

暴力的に巨大事業を行う権力に、全国の労働者や学生が力を寄せ合って、実力で跳ね返したのです。それは道義に基づいた闘いでした。

考えてもみてください。その闘いの勝利なしに、政府がそれまで見向きもしなかった「農民との話し合い」や「自らの非」について、口にする事態がおこったのでしょうか。

40年前の3月26日に空港内に突入し、管制塔を占拠した反対派は、一気に成田空港を廃港にまで持ち込むには、確かに力が足りませんでした。しかし、開港阻止闘争の勝利の記憶は、政府の側が無理無体に暴力的な「解決」に踏み切ろうとする試みを、押しとどめてきたといえます。

現地で暮らし続ける農家があり、それに心を寄せる人々が存在する限り、反対派農家を意向を無視して強権的に空港を造ろうとすれば「また、管制塔に赤旗が翻るぞ」という権力者の怯えは去るわけがないのです。

★前哨戦を通じて準備された 3.26

3.26は1日にしてならずでした。鉄塔決戦が言われ始めた1976年頃に農民の空港建設反対運動はすでに11年を数えていました。

管制塔占拠闘争は、岩山大鉄塔の防衛に向けての準備から始まる約一年半の攻防の集大成としてありました。岩山部落は4000メートル滑走路の南延長線上にある古村で、その台地に二基の鉄塔が建っていました。大鉄塔は、東京タワーそっくりのフォルムを持った高さ60メートル超える鉄塔で、飛行機の離着陸を完全に止めていたのです。

1978年3.26当日に裏方として動いていた現地常駐の活動家(「現闘」と呼ばれていました)は、空港に突入していく者たちが集まった菱田小跡地の「異様な雰囲気、異様な熱気」を証言しています。



「全員が逮捕される覚悟。(略)、『もう今日は全員が捕まるぞ』っていう気分を持っている何千人の集団っていうのは、それはものすごく異様で、そして巨大な力を感じるものがあるんだよ。そういうものは、それまでの1年間をかけてつくられてきたわけだけどもね」は、それを端的に表したものです。

3・26 当日の天を衝く闘争意欲の「気分」は、一つ一つの攻防を経て圧縮され、この日には、もう誰にも止められない爆発的なエネルギーの迸りとしてあったのです。

その過程をおおざっぱに年表で見えます。

・1976年 2月、産土参道土どめ破壊阻止闘争。

5月、三里塚廃港要求宣言の会結成(前田俊彦さん代表)

10月、「(岩山)鉄塔決戦勝利」全国総決起集会。

12月、福田内閣発足。

・1977年 1月、福田首相、年頭会見で「年内開港を内政の最重要課題とする」と発言。

岩山鉄塔破壊道路工事が再開、現地攻防続く。

3月、千葉で「ジェット燃料貨車輸送反対」集会、

4月17日、現地集会に最大の2万3千人結集

5月6日、千葉地裁が4日出した鉄塔撤去の仮処分執行、岩山鉄塔破壊

5月8日、千代田農協前広場で抗議集会。

「5・8」戦闘。機動隊のガス銃により東山薫さんが虐殺される。

5月15日、代々木公園で「沖縄と三里塚を結ぶ」中央集会。

5月29日、「東山君虐殺糾弾」現地大集会。

7月～8月、ジャンボ飛行阻止闘争。三里塚と全国を結ぶ大行進、

10月、現地総決起集会。

12月、横堀要塞の建設はじまる。

・1978年 2月6日、警察機動隊が横堀要塞への攻撃を開始、鉄塔攻防戦。

3月1日、現地集会で反対同盟「3月開港阻止決戦突入」を宣言。

3月26日、「包囲・突入・占拠」闘争。横堀要塞で第二次戦闘、

開港延期を閣議決定(28日)。

年表の冒頭を少し考えて見ます。

空港建設の具体的な動きは常に「道路作り」からです。測量があり、資材輸送や(彼らの側からする)妨害物撤去のための道路が作られていきます。言葉を変えて言えば、周辺の地形が変わっていくことが、強行建設の始まりなのです。

産土様は、古い歴史を持つ岩山部落の人々を見守ってきた神様です。政府は、ずっとこのようにして村を破壊してきました。このとき、71年の代執行以来、表立っては見えていなかった強権的な建設の動きが露になったのです。しかも、これは福田内閣が発足する前でした。

もう一つ、これも成田空港建設らしい話ですが、福田は当初、「年内開港」とぶち上げていました。無理強いにやればやるほど齟齬は重なり、まもなく「年度内開港」と言うようになります。政府は現地の様子も、農民の気持ち、抵抗の意欲、全国の支援者の力をまるでわかっていなかったということになります。

この産土参道破壊阻止闘争は、しかし、その後から思えば牧歌的な雰囲気でした。もちろん、槍を組んで機動隊の盾をボコボコ突いたり、泥まみれになって泥団子合戦ごっこ攻防戦をやっていたのです。かわいらしい前哨戦でした。そこから開港阻止実力闘争は始まっていったといえます。

さて、後に管制塔占拠につながる闘いは、主として「三里塚闘争に連帯する会」という大衆運動団体に参加していたものたちによって担われたものでした。第四インター(第四インターナショナル日本支部)やプロ青同(プロレタリア青年同盟)は、それに当初から参加していた政治党派でした。

この大衆団体は、74年の参議院選挙で、反対同盟の戸村一作委員長を押し立てて選挙運動した者た

ちのつながりで出来上がっていたものです。

全国的な反対同盟支援の体制は、このような大衆的な運動の積み重ねでつくられていたのです。

この財産の上に、一年余りの実力攻防戦で反対派は鍛えられていきました。

もっとも重要なことは、三里塚闘争の特性です。何より、農民の過激な闘いに「学生さん」は学んでいったのです。



★岩山鉄塔破壊反撃戦(1)77年5月8日

三里塚闘争の現場で、鉄パイプとジュラルミンの盾の戦乱的攻防戦が闘われたのは、管制塔占拠の1年前からのことでした。これは、それまで飛行機の離着陸を阻んでいた岩山部落の鉄塔二基が、抜き打ちで5月6日に倒されたことに対する反撃戦として行われたものでした。

もともと開港阻止の闘いは、岩山大鉄塔の防衛戦から始まると考えられていたのです。

権力は「肩透かし」のつもりだったでしょう。

裁判所が撤去の仮処分決定を不意打ちで出し、夜陰に乗じて機動隊が周囲をかため、抵抗らしい抵抗ができぬようにしたうえで鉄塔を倒したのです。

理屈はつきます。「反対派の抵抗による混乱、怪我人を避ける」という慈愛に満ちた配慮です。しかし、裁判官さま、公安のみなさま、警察のご同輩、そんなナマ言っちゃいけません。

反対同盟のじいさんから子どもまで、そんな甘ちゃんではないのです。「あなたがたがそのように育ててくれたではありませんか」と私どもは感じたのであります。

かくして、部隊と部隊がぶつかり、石や火炎瓶が乱れ飛びました。1971年の強制収用をめぐる一連の闘い以来、6年ぶりのことだったとっていいと思います。

このとき、5月8日の空港第5ゲート前で行われた戦闘がもっとも激しいものでした。この過程で坂志岡団結小屋の常駐者、東山薫さんが機動隊員にガス銃で殺されました。

この日、機動隊が使用したガス銃から撃ち出されたのは、催涙弾だけではなく、機関銃弾のよう

な流線型の強化樹脂製のタマが大量に撃ち込まれたのです。

催涙弾はそれ自体、化学兵器のようなもので許しがたい治安武器です。しかし撃ち出されてからの軌跡も見え、避けることもまあ可能でした。

プラスチックの模擬弾はそうはいかない。見えないし、ダメージが大きい。直撃を受けて重傷を負うものが続出しました。東山さんは野戦病院という負傷者救護の仕事をしていたのですが、機動隊は彼の頭蓋を至近から狙って撃ち碎いたのです。

空港反対派はこうしてまたむごい犠牲を引き受けました。

そしてまた、ひきかえに5・8闘争は、現地の闘いの「スタンダード」を手に入れたといえます。その後に向かう意識や闘いの方法を決定付けたのです。政府の側が暴力的に、あるいは詐欺的にことを行おうすることに、その企図を頓挫させる可能性を、現実的に垣間見せてしまったのですから。

鍵は大衆の結集した力、実力による反撃にありました。その闘いを支える共感のうねりを現地・三里塚へ向かって作り出し、陣形を作り上げることでした。

陰惨なテロではなく、爆弾のような支持なき先鋭でもなく、一人ひとりが自分の責任で闘いに参加し、自分の意志と身体をそこに賭ける、過激にして愛嬌ある本質的にラジカルな闘いの方法でした。



★岩山鉄塔破壊反撃戦(2)77年5月8日

三里塚闘争は、支援へ向かった初期の学生や労働者が、実力による生活防衛闘争を学ぶ場でした。そのなかで、開港阻止が日程に上り、約一年の実力攻防で、反対派がさらに鍛えられてきたと前回は書きました。

岩山大鉄塔が闇討ちで破壊されて、その反撃の機こそが、後の開港阻止部隊にとってエポック・メイキングなできごとだったとも。

既にこのときまでに、三里塚闘争は12年の歴史を持っていました。それがどのようなものだったのか。反対同盟にどのように刻み込まれていたのか、ひとつ例を挙げておきたいと思います。

加瀬勉さんという人がいます(『三里塚のイカロス』にも登場します)。羽田に代わる国際空港があちこちに候補地を捜し、成田市隣の富里町に決定しかかったときから、空港反対運動に関わってきた人で

す。社会党員で、日本農民運動のオルグでした。富里、三里塚と、誰よりも農民の運動を長く見てきた人です。

1977年5月8日、部隊は、戦闘が終えて横堀の労農合宿所前に集合していました。戦った部隊が持つ鉄パイプは、ポケモンのピカチュウのしっぽのようにひん曲がっていました。

脳死状態に陥っている支援者の名が告げられると、「かおる～」と、悲鳴のような長く尾をひく声があがりました。パイプが揺れ、「報復だ！」という声も響きました。

総括集会は「権力の虐殺行為を許さず、東山薫の意志をついで闘う」という発言が相次いでいました。いったい、こんな犠牲を前にほかに何を語ればいいのか。

しかし、それらの発言は、言葉の軽さばかりが浮き上がって、中空に消えてしまうかのようでした。

そこに、初めて加瀬さんが壇上に立ったのです。加瀬さんが現地の集会で発言するのを、それまでもそれから見たことはありません。

加瀬さんは傾いていく陽の中で、髪を振り乱しながら部隊に向かって獅子吼しました。彼は、地に付く鬼人のように闘って死んでいった大木よねのことを、くびれて下っていた青年行動隊の三ノ宮文男の遺体を自ら木から降ろした日のことを、全身全霊をかけて語りました。

「三里塚の大地は血を吸い、闘争はその血で進んできたのだ……」と。

それは新左翼と呼ばれる運動の中で、聞いたことのないアジテーションでした。内容と質と迫力において、まるで違うものでした。

加瀬さんは特別なことを言った訳ではありません。

「これが三里塚闘争」。彼はそう言ったのです。日本の農民運動、住民運動が持ちつづけ、格好付けの日本の「学生さん」「新左翼」になかった、真の意味の過激(土着的なラジカルリズム)と、その粘り強さ、闘うものの腹の据え方を語ったのでした。

5・8 闘争は、単にある部隊が実力闘争をやりきったというところに意味があったのではありません。東山薫というかけがえのない命を犠牲にして、涙も怒りもいっしょくたになり、それでも進む三里塚闘争の特質が、支援者たちの胸の内に深く刻み込まれたことが重要だったのです。

闘争に命をかけることを簡単に受け取るふりをするな、利いた風な口をきくんじやない。このようにして闘争は続けられてきたし、続けられていくのだ、と。

私個人は、そのようにあの演説を聞いたのでした。

★岩山鉄塔破壊反撃戦(3)77年5月8日

この駄文を某所に書き綴っていた折に、どなたか存じ上げぬのですが、5.8 闘争の現場にいらした方が書き込んでくれたものがあります。空気をよく表現しているので、ここに再掲します。

あっと、代島さんの『三里塚のイカロス』が毎日映画コンクールの「ドキュメンタリー映画賞」を受賞したのですね。めでたい！ ころよりお喜びを申し上げます。

あの日(1977年5月8日)は、千代田農協前から一端移動を始めた時点で、鉄パイプは折れ曲がり使い物にならなくなっていた。皆が口々に「もっと太いのはないのか」と云っていた。全身から立ち上るガスにおいて、またげーげーしながら、畦道で田の柵に使われたパイプを探したりもしていた。小次郎スタイルにしたときに、抜き出し易いと考え、「配給」されたくらいのモノになるんだろうが、役に立たなかった。

FIH(国際主義高校生戦線)から活動を始めた私は、いわゆる「ゲバ棒世代」ではなく、少し遅れて来た世代だ。「武装」は身近では無かった。芝工大の寮に残る「学生インター武装突撃隊」などの落書きを前に「先輩」の専従から「激しかった頃の話」を聞かされるくらいだった。然し、所謂テント村建設前後の「訓

練」、トラックで遠くに連れて行かれて、歩いて帰ってこいとか、「組み手」をやったりとか。あの辺りから次第に「武装」というモノがなし崩しに身近になっていった。

しかし、77. 5. 8 あの日は全てにレベルが違った。500に満たない部隊だと思ったが、鉄パイプを握りしめて朝倉を飛び出していった我々の決意は次元が違っていった。然し、この日は敵も次元が違っていった。何しろ機動隊が打ち込んでくるのはガス弾だけではない。魚肉ソーセージと同じくらいの大きさで、色も同じようなピンク色の強化プラスチック弾(おそらく東山君に打ち込んだもの)をぽんぽん水平打ちで打ちこんでくる。そんなのがうなりをあげて耳元を、メットをかすめていく。

その弾を拾ってポケットに入れた新聞記者が、機動隊にけっ飛ばされているのも見た。「格好付けの日本の学生さん、新左翼」だったかもしれない我々も「腹を据える」事をたたき込まれた日であった。そうして僕らはへとへとになり、足を引きずって労農合宿所にたどり着いた。

「水平打ち」「死者3名」「いや1名」そんな言葉が飛び交っていた。そこで始まった加瀬さんの演説は、そんな僕に、我々に、ずしっとのしかかった。「ディエンビエンフー、インターナショナル」、そんな言葉が北総大地にこだました。この大地で戦うと言うことは絵空事ではなく、こういう事なのだと、あらためて自身に刻み込む事になる、そうした演説であった。



★テスト飛行阻止闘争(1)

岩山の鉄塔が闇討ちで撤去されてから、まもなく4000メートル滑走路を使って離着陸するテスト飛行が開始されました。頭上を通過していく飛行機を小屋から初めて見たときには手を伸ばせば届きそうだと思うくらいの高さ(低空)なのでありました。それまで静かな田園地帯だった岩山や朝倉といった部落は、航空機の騒音が真上から降ってくるようになりました。

ある農家に行ったとき「ヤギの背中がなんかじっとりと油がつくような感じがしてよ」という話を聞きました。岩山や朝倉は騒音で追い出しを掛けられている、という状態です。

テスト飛行はこの空港になれる訓練です。タッチ&ゴーという滑走路に降りては止まらずそのまままた飛び上がっていく、という確か慣熟飛行訓練と呼ばれていたはずです。夏にはひととき大きなジャンボジェット機が飛来するようになっていました。

もちろん、そのまま反対派は指を加えているわけがなく、その朝倉あたりからアドバルーンが上げられ、きっちり飛行はとまるのであります。それをやれば、もちろんアドバルーンを撤去にやってくる機動隊と追っかけっこ。

ピシッピシッと白い粉を飛ばす催涙弾が道を滑るのを横目に、たいがい一目散に林に駆け込み、彼らが去るのをじっとやり過ごすのです。頭上にはヘリがいつまでも部隊を探し続けるというわけです。

慣熟飛行阻止・ジャンボ阻止闘争は、ある意味とてもそのころの三里塚闘争を象徴していたように思います。農民と支援の労働者・学生がきっちりつながって、なるだけ無駄な犠牲を出さぬようにしながら、やれる打撃は与えていくという方法です。

自分たちのホームで闘うというのはアドバンテージがあるものです。やってきた機動隊は思いもよらない所からいきなり攻撃をかけられて、大慌てになるなんてこともあります。ほんと、そういうときって情けないくらいに機動隊は弱くなる。

後に厳寒の横堀要塞で2昼夜放水に耐えることになるOさんなど、なにかと機動隊からぶんどった装備を掲げて記念写真など取っておりました。悪い子です。

そうはいつでも時折、逮捕者は出します。アドバルーンを上げつつ、一方で空港ゲートに数十人がトラックで乗り付けて、ひと暴れしてくるなんてことがあると、撤退時にころりとトラックから落ちて、「あ、200万がおちた」なんてひどい言い草になるのであります。保釈金です。火炎瓶や鉄パイプが標準装備になれば、なんだかそんな感覚になってしまいます。やっぱりみんなも悪い子です。

ある日、トラックで乗り込んだ兵隊さん私は、空港第5ゲート前だったとおもいますが、赤だか青だかの色付き放水を見舞われました。濡れるの嫌いなので、当たってあげませんでした。なんだか現在のわたくしのごとくに元気がなく、ちょろりんのへなへな放水なのでした。放水に勢いがついたのは、さっさとわが隊が撤退にかかったあとだったかもしれません。色付きの水の装填に慣れていなかったのか、いや突然の部隊の出現に射手がビビってしまったのか。

はい、あちらがタッチ&ゴーなら、こちらはヒット&ウェイなのであります。

全国からやってきていた特に学生どもは、そんなことをやりながら、数日間現地に留まって援農に入っていたのです。

そして、大事なことはこんなことをやりながら、すでに空港に突入し管制塔を占拠するプラン化は進められていたのです。

★テスト飛行阻止闘争(2)

この頃の記憶にある話を書いておきます。

最近、狭山事件の石川一雄さんが再審を求めて、裁判所前に立ってアピールしている記事をFBでもよく見るようになりました。彼の裁判の上告棄却の報を聞いたのが、このテスト飛行阻止で現地に駆り出されていた時のことでした。

「人民耕作地」と呼んでいましたが、三里塚には耕作を放棄された農地がけっこうありました。地主ではない現闘がその耕作を続けたのです。

理由はさまざまあったでしょうが、反対同盟員が持つ田や畑のすぐそばに雑草生えまくりの手の入らぬ土地がなるぶのは、営農にとっても困ることは誰が考えても分かる。援農(反対同盟の農作業の手伝い)はもちろんのこと、現地に小屋を持つ支援者で、独自に耕作を続けた土地があったのです。

1978年の8月9日、汗塗れで一息つきお茶を飲もうとした時に、この畑で私は「狭山裁判上告棄却」の報を聞かされました。すぐに全国に緊急動員がかかり、関西に戻る予定だった私は三里塚から日比谷公園の抗議集会に向かったのです。

狭山裁判は被差別部落出身の石川一雄さんが、殺人の冤罪で逮捕・起訴された事件です。部落差別による予断による捜査とでっちあげで逮捕され、彼はこのときまでに14年間を拘置所でとらわれていたこととなります。

裁判そのものは一審でまともな審理がなされないまま死刑判決が出され、高裁でようやく差別が根底にある人権侵害・冤罪事件として、闘いがなされることになりました。高裁では死刑判決が破棄され、無期懲役になりましたが、それはもちろん被告の石川さんを有罪と認めたものでした。この判決が最高裁に追認されて、石川さんの上告を棄却したのです。

上告棄却で刑が確定した石川さんは、千葉刑務所に下獄しました。千葉拘置所(刑務所房に暮らしていたものもいた)には春からの闘いで逮捕された三里塚闘争関係の被告が数十人いました。このあと、「おい、石川さんに会ったよ」という話が、けっこう外に伝わってくるようになったのです。

石川さんも、あの日からまた40年を無実を叫びながら生きてきたこととなります。殺人罪による無期懲役で、その罪を認めないまま、仮釈放になるというのはたいへんなレア・ケースでしょう。彼を応援してきた弁護士や支援者達の奮闘もなみなみならぬものだったでしょうし、石川さんの意志の強さにも驚嘆させられます。

同じ獄中暮らしや、その後のシャバの生き方でも、わたしらお笑い管制塔戦士とやらとは比較になりません。人が学ぶべきは彼の不屈の数十年なのだと思います。

数年前に地下鉄の駅でばったりと石川さんとお会いしました。ああいうときはただただ身が固まってしまうらしい。数秒間、わたしはそこに突っ立ったまま、石川さんを見合ってしまったのです。そんなにまじまじ見つめられたらというふうに、あるいは「この人誰だっけ？」というふうに、石川さんもこちらを見つめ続けるのであります。

「石川さん、ですよ。少しの間、千葉刑でご一緒していたのですよ」

そばにいらしたお連れ合いが

「まあまあ、お仲間なんですねえ」というのであります。

1970年代はすでに遠い。若い人たちにこの時代の雰囲気伝えるのは難しいのかもしれない。酷いことがたくさん起こっていましたが、その不正義を許さぬ空気も確かにあったのです。その気持ちはつながり合っていました。

三里塚は、まちがいなくそれら一つ一つを結び上げて、闘っていたのです。

(つづく)

NO486 成田空港管制塔占拠40周年「開港阻止決戦って何だったのよ、ドキュメント」その2

今年は激動と変革の時代、1968年から50年目の年である。50周年を記念して集会や本の出版が企画されているが、もう一つ、1978年の成田空港管制塔占拠から40周年の年でもある。3月25日には、「三里塚管制塔占拠闘争40年 今こそ新たな世直しを！ 3・25」が御茶ノ水の連合会館で開催される。

この管制塔占拠闘争に関わったH氏が、フェイスブックで『開港阻止決戦って何だったのよ、ドキュメント』と題した連載を掲載中であるが、この連載記事を私のブログに転載させていただくことになった。記事は3回に分けて掲載する予定であるが、前回(2月23日)に引き続き、今回は2回目を掲載する。(転載にあたっては、H氏の了解を得ています。また、写真はブログ管理者の独断で刑しあしたものです)

【開港阻止決戦って何だったのよ、ドキュメント】その2

★横堀要塞戦(1)

1977年の秋以降、政府と反対派のせめぎ合いの主戦場は、滑走路の延長上にあった岩山・朝倉から横堀部落へと移って行ったのでした。当時の道に沿って辿っていけば、空港東側を北上し菱田の辺田部落をすぎて、坂を登っていった開拓部落です。

要塞は当初、鉄塔跡地の岩山要塞と、横堀の横風用滑走路予定地のど真ん中に建設が構想されました。岩山要塞は映画『三里塚のイカロス』のラストシーンに出てくる、あの鉄塔が立っている建物です。岩山要塞はなんとか完成したのですが、問題は横堀にありました。横堀の当初の予定地は、空港反対同盟の瀬利誠副委員長の家があったところでした。

反対同盟という組織は実におもしろいというか、知恵があるのです。一見、せめぎ合いに負けているように見えても、次の展開の備えて手が打ってある。転んでもタダでは起きない。瀬利副委員長が土地を売って、横堀の地を去ったときも、この宅地は、後の反対同盟の代表になる横堀部落の熱田一さんに、土地の名義が書き換えられていました。

要塞の準備が開始された当時は、インターの横堀団結小屋として利用されており、常駐者がおりました。ここで最初の「穴掘り」が開始されました。

これは大変でした。とにかくここには「妨害物は建設させない」という警備の意図が、現実の介入としてギリギリとやってきたのです。

やがて横堀要塞の建設地は、もう少し北東へ移動します。インター横堀団結小屋が横風用滑走路のど真ん中だとしたら、新しい建設予定地はこの滑走路に接する、もう一本の滑走路(4000mに平行する2500mの滑走路)の延長上に位置する場所です。

辺田部落の三ノ宮さんの所有する畑の一角でした。

71年の代執行後、自ら命を絶った三ノ宮文男さんの家が、この土地を反対運動のために提供し、ここで、これより建設開始から2ヵ月後に壮絶な二月要塞戦が闘われることになるのです。

横堀要塞の建設は、その役割と闘いのイメージのもとになる経験がありました。どんな闘いでもそうなのでしょうが、先立つ闘いの財産や教訓が引き継がれているものです。

開港阻止決戦まで、当時の第四インターの三里塚闘争の方針を立案していた一人、柘植洋三は次のように語っています。

壮絶な2月決戦* (『1978・3・26 NARITA』)

柘植●当時の「三里塚反対同盟」はとても大きな組織で、その中で作戦参謀として活躍していたのが、Yさんのお父さんと岩沢吉井さん(現闘の若者たちから「岩沢のじいさん」と慕われた反対同盟の老闘士。2002年に92歳で亡くなった)でした。第四インターが立てた「塹壕にたてこもって強制収用に対抗する」作戦は、この2人を通し、反対同盟の方針として確立されていきました。

横堀要塞が建設されるまでには、いくつかの紆余曲折がありました。

反対同盟の建設決断について、一部の記録に、「熱田一さんが風邪をひいたために遅れた」といった書かれ方がされていますが、これは事実と異なる……というかぼかしています。熱田さんには当時、多くの党派からの引き合いがあり、簡単に決断できない状態にあった。その迷っているところに岩沢さんがやってきて「ここで旗を上げなければ開港阻止闘争はどうなるんだ」と詰め寄り、ついに決意する——これが真実です。

そしてやっと、横堀団結小屋付近に要塞をつくる作業が始まるのですが、その直後、朝日新聞に図面が流失して、それが記事になってしまう。これを見た権力側は、収用用地内に永久建造物がつくらせまいと、収用法の適用を前提に、工事妨害の準備を始めた。そこで建設予定地を三ノ宮さんの畑に移動する

ことになったのです。(『1978・3・26 NARITA』)

実は、じいさんは太平洋戦争中に横須賀の猿島砲台に砲兵としていて、その経験が大きかったのです。行ってみれば分かりますが、猿島は隧道、切り通し、を駆使して地下要塞化が図られていた砲台でした。じいさんは自ら穴掘り、塹壕掘り、そして穴の中で暮らしては、敵機がくれば砲に駆け上がり、撃ちっ放していた人だったのです。

横堀に要塞をつくるという反対同盟の決断の様子を、じいさんは次のように語っていました(岩沢への平田インタビュー)。

●岩沢吉井 横堀要塞をつくるのにどうするのかと。2,500(mの平行滑走路)の先端でやろうか、もしくは3,200の横風用でやろうかと。で、オメらの方の小屋(インター横堀団結小屋)を使おうとなった。あれは熱田さんの名義にしてあるから熱田さんを何とかしなくちゃならない。今度は熱田さんは区長だということでしょう。で、くどきに行った。

さんざんくどいたら「よかつぺや」と。で、「よかつぺ」じゃ困るんだと。いいならいい、悪いなら悪いときちんと決めてくれと。あとのことはあとのことでそれなりに考えるからと。とにかく基本になるのはそこから出発しなければ……お前は何のために軍隊で歩兵の下士官(班長)をやってたんだと大声でいつてきた。こうなるとおれのいい方がちょっとやくざめいてきちゃうんだよな。

で、熱田さんが、「使ってもらうべや」と。

じゃ、そのように話を進めていくぞと。ただ、(この段階では)重大な闘争の場所として使うよ、としかいつてなくて、鉄塔を建てるとかはいわなかった。

で、計画進めて図面つくって持って行って説明した。「これは熱田君、工事をやって成功して、引き渡しを受けた時点で同盟のものとして運動に使うから」と。

(後日)「つくりたい」というのがこの間のあんたの答えだから計画を立てて図面をつくってあんたに見せた。で、このことの責任者をあんたにやってもらいたいからと。

図面はオメらの小屋のどっかでつくったんだよ。おれがやること関するはみんなオメらがひっかかってんだ。それで初めて仕事になってオメらがブロック、戸村選挙でやった横堀のグループがかたまって闘いが組めたんだから。中核は中心に入っていないはずだ。

それで、今度は熱田さんに、「これで責任はあんたに移ったんだよ。これからあることはあんたの指揮監督に任せるよ。しかし相談相手には私になりますよ」と。

じいさんはなかなか怖い人であったのであります。

ええ、それでも私にはやさしかったのですよ。惚れちゃったもんね。

★横堀要塞戦(2)

三ノ宮さんの畑の一角の横堀要塞は、不眠不休で建設が行われました。全国からやってきた学生中心の「建設現闘」数十人が、三交代で穴を掘り、型枠を作り、セメント粉にまみれてコンクリートを打設していったのです。

三里塚は雪こそ降りませんが、冷え込みといたらなかなか凄まじい。日が落ちればぐんぐん冷えて凍てつく土を踏みながらの作業です。完成をうたう空港の燈火がすぐそこに煌めくのを睨んでは、「いまにやってやるから！」の建設現闘の心意気であります。

ミキサー車にぶら下げられたラジカセからは、威勢のいい労働歌！……ではなく、ばんばん売り出し中になってきた中島みゆきなんぞがかかっていた。

反対同盟は、ブルを動かすIさんの姿がよくありました。「この人、大工さんだな」と思う人もいて、学生さんたちに指示しながら、自分もさっさとノコを使ってドジなところを補強する。建設が本格化すると、他の反対同盟の人たちもよく現場を訪れていました。もちろん、折りあれば差し入れ。現闘でなかった私達も、お手伝いに行っ、そんなおこぼれの幸運に出会うこともありました。

警戒のヘリが建設中の要塞の上に飛んできては、警告をしていました。まだ、できてもない用地に対して、それも敷地内でもない場所の「形状変更」は違法というのでありました。横風用の滑走路予定地からこの場所に要塞建設地が移されたのは、「空港建設予定敷地内であるか否か」が大きなポイントでした。その分、政府の側はこの場所の要塞妨害に動きが遅れたのでしょう。

壁の厚さ1メートルなんて話が支援者の口にのぼり「完成したら壊せんわ」の期待が語られ、一方で「空港突入占拠ってどうやるんだ？」の、これまたお笑いのような戦術が語り合われていました。

反対同盟の動きでも分かるように、岩山鉄塔が破壊されてのち、この要塞が人々の意識をひきつけ、幻想のような希望のような、はたまた確固たる信念が集って形を取るような場となっていきました。

なんでも「ヘルメットにツララを垂らしてたったまま眠るやつ、叫びだすやつ、ささいなことで喧嘩を始めるやつ」続出の限界のさなか、要塞破壊に手をつけてきた機動隊との「厳寒の40時間の死闘」が始まるのでした。1978年2月6日のことでした。



★横堀要塞戦(3)

2月横堀要塞戦の戦端が切って落とされたのは、6日、まだ明け切らぬときでした。

2月4日夜、要塞の3、4階部分に相当する部分にビル用鉄骨が組み上げられ、日をまたいだ午前1時頃、その上に一気に20mの鉄塔が立ち上げられたのでした。

反対同盟の「やる！」の決定が3日。むろん、今度は岩山大鉄塔撤去のような闇討ちは、けっしてさせない、ケンカの準備をして臨むということでした。

もちろん、機動隊がこなければ、すぐには戦闘にはならない。しかし、来れば直ちに、徹底抗戦に入る、ということでした。

公団・機動隊からは「航空法違反」の警告が繰り返し行われていました。事業認定から漏らしていたアプローチエリアの「航空法違反」です。2月1日の「警告」では、「高さ9mを越えれば、航空法違反となる」という、あきれかえった理屈でありました。

建設できなかった数十年間には、時効という法の原則にも思い切って目をつぶるサービスをしてやるとして、それにしてもあの時点で9mの高さ制限とはこれいかに。

彼らの本音は、「こんなコンクリートのどデカイ箱を完成させてしまったら、この先も撤去できなくなる」であったでしょう。

反対派は「やっちゃうもんね」でしたから、3、4階部分の鉄材ががっしりと組まれた時点ですでに12m、「航空法違反」ということになりました。

この鉄骨を柱にして、コンクリートを打設されたら、ほんとに彼らにとって、大変なことになるのであります。

5日、午後1時すぎ、大量の警備車両と機動隊を引き連れて、公団が「警告」にやってきたのでした。係官の緊張して上ずる声、えらく具体的な細かい条項。形だけの「警告」とは明らかに違っていたそうです。夜、あちこちから機動隊の動きが急と知らせが入るようになります。大掛かりな動員では、高速道路を走るカマボコ(機動隊バス)の数や、緊張感は隠しようもないし、公団周辺で取材している新聞記者は受ける印象がいつもと違って来るものです。

鉄塔が立とうが立つまいが、機動隊はこの要塞に手をつけにくるという決意と方針をもっている、ということがはっきりしたということです。

「明日、来る」の情報は、徹夜続きの建設隊員を色めきたたせ、必死に作業を急がせます。この時点では、もう要塞完成ではなく、戦闘準備に入るしかない。

反対同盟が籠城の人選に入り、大量の戦闘ブツが運び込まれます。

6日、4時半、反対同盟の緊急動員の通知。5時過ぎ、要塞外周の支援をする労働者や学生が労農合宿所あたりに結集して、部隊が編成されていきます。

6時前、横堀街道(横堀と菱田を結ぶ村の動脈)で、最初の戦闘が開始されます。いろいろ勇ましいことが言われるのは世の常であります。ま、小手調べ。要塞が最後の戦闘準備に入る時間を稼ぎながら、機動隊に少しでも打撃を与えるということです。

朝焼けの中で、朝日とは別の赤い色と黒い煙が、この街道を包んだのでした。

要塞に立て籠もったのは40数名。その中には6人の反対同盟の幹部たちがいました。

内田寛一行動隊長は朝倉部落で酪農を主にやっていて、芝山町の社会党の中心人物でもありました。熱田一さんは横堀要塞の責任者、横堀部落の人格的な代表者でもあり、後に反対同盟(熱田派)の代表になった人。当時の肩書きは副行動隊長でした。小川源さんは、二期用地内の木の根部落を開拓で作上げた、これも木の根部落の代名詞のような存在。石井英祐さんは辺田部落の重鎮、地域や農協関係の核になる人だった。岩山部落の長谷川タケさんは「長谷川せんせい」と呼ばれた方。元教師の婦人行動隊長。小川むつさんは婦人行動隊の副隊長で、のちに農協全国理事になって農村の女性をリードしていく「ほんと地頭のいい人格者」(ある新聞記者)です。

いま、これらの人々の名前は、ほとんど実名で出てきません。しかし、私はあえて書き記します。亡くなったり闘争を離れたりして、名前が過去に霞んでいる人もいます。それだけなら、まだいいのです。

彼らの名誉と名前は記憶されなければなりません。

のちに、中核派を中心とする「支援」党派が、農民政府との接触、成田用水問題、一坪共有地問題などで、「脱落派」だの「裏切り者」だの、あきれ返る物言いで、これらの人々を非難し中傷し、家まで押しかけ

て脅迫まで及ぶ行動を行いました。

よ〜く、覚えておかなければならないのは、この要塞建設から二月要塞戦の激闘を、反対同盟のこれらの人々は力の限りに闘ったということです。もうひとつ、よ〜く覚えておかなければならないことは、のちに彼らを非難した連中は、これらの闘いの最中、ほとんど影さえみえぬ「闘わぬ人々」であったという事実です。

嘘だというのなら、当時の新聞でも資料でもひっくり返してみればいい。

その党派が自己の勢力(メンバー数や資金を含めて)、それにふさわしい人とカネを拠出し、闘いを組み上げる努力をしたのか。別に逮捕されることがいいわけではないけれど、何人の逮捕者を出し、それが全体の逮捕者の中に占める比率はどれくらいだったのか。

人は恥というものを知らなければならぬ。前衛を名乗っていたのなら、さらなり。

農民を責めるような資格があったのか、考えてみるがよろしい。

さて、立て籠もった 40 数人は徹底抗戦をやりました。

機動隊は「航空法 49 条違反の容疑で現場検証を行う」というのであります。引き連れてきた大型クレーン 2 台は「では何のため？」です。

タケさんは「夜もあけぬうちから、非道な行為をするというのですか。ここは私たちの土地、ただちに出ていきなさい」

近寄る機動隊員の上に、火炎瓶と石つぶてが雨あられ。

機動隊は「内田さん、違法行為をやめさせなさい。さもないと、あなたたちを逮捕することになる」と、やさしいご警告。

内田行動隊長「私たちはこれまでの生涯すべてをかけて、ここにいる。逮捕など覚悟の上だ」

熱田さんは要塞から身を乗り出して両手を広げて叫ぶ。聞いたのは、要塞内にいた籠城組だけでした。

超低空にホバリングするヘリの音で、周囲に聞こえるわけもない。

この時のことを、その後、鉄塔最上部にしがみついて、酷寒零下の放水に耐えつづけることになるのは、「簡潔な言葉だった。闘って生きてきた人の本当の言葉に心を打たれた。短く『感動した』と伝えた」と振り返りました。

からだ、生涯、胸のうち、すべてをそこにかける農民と、ともにいる労働者や学生の間には虹がかかる一瞬。そりゃ、幸せでございます。

クレーン車の前に婦人行動隊が身を投げ出す。機動隊が容赦なくジュラルミンの盾で殴る。立て籠もった石井英祐さんの妻、節子さんが、つまりジューゼム(屋号・十左右衛門)のおっ母あが顔を盾で割られる。鼻の骨を折られ眼の下が陥没する。

これが空港建設だ。成田空港が作られてきた姿そのもの。

節子さんは「機動隊が見えたから要塞に入るか、クレーン車が来る道を塞ぐがしかないって思って、機動隊のところへ駆け出していったんだよ」

なんていう人たちなんだろう、俺は泣けてくる。



★横堀要塞戦(4)

機動隊の急襲を受けたとき、要塞は完成していませんでした。

3階部分に板枠の防具をめぐらし、旗を飾り付けてあったと記憶します。

かろうじて機動隊の突撃を跳ね返して、中に籠ったのですから、支援者の方はあらかじめ人選されて準備されていたとは思えません。

切磋琢磨してこそ、好勝負ができるのでありましょう(マルキとの切磋琢磨にまるで興味のない「最大支援党派」も前述のごとくありましたが)、警視庁の誇るレインジャー部隊まで投入して攻撃に移った割には、ちょっと情けない泥縄攻撃でした。

こういった間抜け振りは、3月の開港阻止決戦にも、実はいかなく発揮されるのでありますが。

反対同盟は実に反対同盟らしく闘っていました。

おっかさんたちが、阻止線を張る機動隊の盾をゆすっては、「おっとうに弁当をもってきただよ。自分たちの土地に入っていくのに、なんでおめえたちは、じゃましてんだ」と食い下がります。

機動隊は、要塞に向かって放水を繰り返すうちに、下はどろどろのぬかるみと化し、どでかい重機は身動きならず、それでもやりようがないから、時間ばかりがかかる。

機動隊は頭上を盾で覆って動き回り、それが射程距離に入れば、籠城組は「てっ～！！」とビンやら鉄材やら石やらを放つのでありました。高いところから機動隊のあの姿をみると、コックローチそっくりです。ゴキブリ退治に使うにしては、ちと過激すぎるものが投下されます。何度かの機動隊の総攻撃は、どひゃああ、と寄せては、ボコボコとブツを放られて、撤退の繰り返し。

一方、辺田と結ぶ横堀街道だけでなく、空港周辺でヒットアンドアウェイが起り始めます。検問所、ゲート前にトラックに満載された赤ヘル部隊が乗りつけ、攻撃を加えていたのです。

機動隊が要塞への進入路を確保したのは午後遅くなってでした。

ここから本格的な放水が始まります。高さ 20 メートルのゴンドラを備えた高圧放水車など、十台の放水車が要塞に接近して、猛烈な放水を開始しました。

要塞が水煙にかすんで見えなくなるという凄まじさ。

けれど、また、この放水のさなかに鉄梯子で近づく機動隊に、火炎瓶や鉄片、石などを投げつけて抵抗する籠城組の姿が、水煙の霞みがたなびく向こうに垣間見えるのでした。

6日午後4時過ぎ、要塞近くに取り付いた機動隊が、催涙ガスを乱射し始めます。またまたクレーン車を近づけようと、図ったのであります。

すでに放水車もクレーン車も、火炎瓶を落とされて炎上、後退して消化液まみれになっていたのです。ガス弾の援護射撃も、「チェックメイトキング2、マル対の抵抗が激しく持ちこたえられません」てな具合でした。

クレーン車に3発の焰ビンが着弾、炎上。またまたクレーン車は後退なのです。

三里塚の大地に日は落ちて、ついに夜戦に突入したのであります。

何台もの投光器の光に照らし出されて、要塞はますます堅牢に居座り、地上 30m の鉄塔はいよいよよりりしい姿でそびえるのでした。

火炎瓶よけの金網トンネルが持ち出され、そこを通過して機動隊の射手。えらいぞ、機動隊、いい根性だ。そして、ガス弾が当たって跳ね返る音が、カン、カンと遠く離れて見守っている支援者の耳に連続的に響いてくる。

超高圧の放水と、息も出来ぬはずの催涙ガスの乱射の中で、あらゆるものが投げつけられ、ついにはガソリンが上からまかれて、焰ビンで火がつけられます。

要塞の外壁一面がぐわあと炎に包まれたのでした。放水でも炎は衰えません。

こうして、また、機動隊とクレーン車はすごとごと撤退。

夜8時、ついに機動隊の指揮官車がマイクで要塞に呼びかける。

「これ以上、立て籠もっているのは君たち自身が非常に危険になります。ただちに出てきなさい」

これは警告ではありませんね。確かに命ぎりぎりのところに籠城組はいました。日が暮れての放水でずぶ濡れになった彼らは、身体を凍らせ、ヘルメットに氷を張らせ……、体力を奪われていきました。しかし、むしろ、この呼びかけは機動隊の悲鳴でありました。

「悲鳴」がもっと深刻になっていくのは、これからなのであります。

また、数次に渡る横堀街道の外周戦で、反対派は3人の逮捕者を出しました。実は3月の管制塔占拠の隊長に抜擢されていた男が、その中にはいたのであります。代わりに8ゲート大隊の指揮者から管制塔攻略部隊へと移る前田くん。

ああ、不運なのか運がいいのか、我らがデバラ・前田隊長。



★横堀要塞戦(5)

2月6日午後10時、放水とガス弾の乱射のなか、クレーン車のアームが要塞3階部分の防御板を破ります。穴は横に広げられ、鉄骨が剥き出しになります。

内田寛一行動隊長や、熱田一さんはじめ、6人の反対同盟員は、この防御板から半身を乗り出す最前列にいました。本当に揺るがない人達でした。

機動隊はそこに梯子をかけて決死の登攀。投光器の光のなかに、催涙弾を浴びながら、梯子を外そうとし、焰ビンを投げ、抵抗しつづける籠城組の姿が浮かび上がります。

要塞内の火炎瓶に引火した炎が、火柱が。

20分後、機動隊はついに3階部分に侵入。水と催涙弾のカクテル液にずぶずぶになりながら肉弾戦。ポコポコ…ポコポコ、ま、やられます。

引きずられたり、ヤツケを引き千切られたり、けが人多数。

いいんだよ、十分やったんだからボロキレになっても、しっかり誇りをもって、連行されていけば。

ここでの逮捕者、反対同盟6人を合わせて45人。

彼らが乗せられたカマボコに、おっ母さんたちがとりすがる。

だがあ、まだ鉄塔の上に、4人が残った！

ここからほぼ24時間、零下7度の夜の寒風、放水、飛んでくるガス弾を受けながら、4人は頑張りぬくのです。

北総の闇の中に投光器に照らされた鉄塔がそびえ、その間を通して、彼らが鉄塔を鉄パイプで打つ音が、カン、カン、カン…と響いてきます。

生きている証。

夜がふけていくのに、次々に反対同盟や支援が要塞が見える台地の阻止線の外側に集まってきます。

彼らは、封鎖された道を迂回して、谷に降り、あぜ道を踏んで、四つんばいになって林を這い登って、やっ

てくるのです。

そう、トロツキーが『ロシア革命史』でかつて書いたではありませんか。コサック兵の馬の腹の下を通過して進む労働者の姿を。「革命は道を選ばない！」

ここは、農民の大地であり、機動隊は侵略者。地を知り大義をもつのは三里塚農民。

鉄塔のてっぺんには、インター現闘員の大島。

鉄塔にしがみつき、支援者が焚く火に向けて、音で闇夜を裂く鉄パイプ。三里塚3月開港阻止決戦へむけての命がけの打鐘棒でした。



★横堀要塞戦(6)

高さ12mの要塞の上にそそり立つ20mの鉄塔には、中段と頂点近くの高段と二つの足場がつくられ、防護柵がしつらえてあったように記憶しています。

鉄塔のてっぺんには、

♪輪輪輪があ三つ、の反対同盟旗が翻っていました。夜が更けるにしたがい寒気に覆われ、放水に濡れそぼった同盟旗は、凍てつきながら鉄塔にまとわりついていて、という感じでした。

鉄塔四戦士とても同様、かぶったヘルメットにツララをさげ、この酷寒の夜を耐えます。

谷津を挟んだ台地に据えられた宣伝カーから激励の声が響いていました。。

「眠ってはいけない、凍死の恐れがある。声をかけ、励ましあって、戦い抜くんだ…」

点々と焚き火の炎があがる台地で、腕を組んだ支援者がインターナショナルが歌う。サーチライトの鉄塔上で、彼らも身体を揺らして歌っているらしい。

「俺らは歌を歌うぐらいしかできんのか、いったい何しにここに来たのか？ 火に当たっている自分がなん

か情けない…。早く、早く…朝が来てくれ」

正直に言うと、そんな感情をもって、鉄塔を見つめ続けておりました。

さすがに朝まで放水はなかったように記憶しております。

けれど、夜が明けるや、直ちに強烈に水が四人に叩きつけられ始めたのでした。

そのたびに、鉄塔は揺れ、反対同盟旗の結わえてある戦端のポールが撓みました。

よせばいいのに、お前はマゾヒストか、大島さんよ！

撓むポールにわざわざ登りあがり、旗に身をくるむようにして、放水を浴びに行く。

ただひたすらしがみ付いて、ヘルメットを高圧の水のほうに傾けて、揺れているのです。

中段にいるお仲間は、これまた銀色の防護服をきた機動隊のレインジャー部隊が近づくたびに、ありとあらゆるものを落として戦い続けていました。

遠く離れた支援者のところまで、音が聞こえてきそうな放水で吹き飛ばされそうになりながら、タンクが空になって放水が止むと、ドバッと立ち上がって両手を振り、パイプを打ち鳴らして、こちらに挨拶を送ってよこすのでした。

いやいや、ほとんど機動隊を愚弄しているというようにも見えるのでした。

こうして何度も何度も、凄まじい高圧の放水を身に浴びながら、彼らはまた夜を迎えたのでした。

横堀街道でもまた、火炎瓶による攻撃が、機動隊に向けられます。

反対同盟は「飯を届けさせろ。上杉謙信だって信玄に塩を送ったではないか」と詰め寄っていました。

後で聞けば、アドバルーンを使って運べないかという案まで、検討されていたのだそうです。

日が落ちてからは、反対同盟のおっ母さんたちが、別の人間に詰め寄るのでした。

「もう、おろしてやってくれ。りっぱにアンちゃんたちは闘ったでねえか」

要塞建設のときから、現場につめて、この闘争を建設隊と一緒につづけてきた青行の新二さんや、インターの指導部相手に、涙を流しながら懇願し、命令し、「おろせ」と詰め寄るのでした。

(反対同盟ではない、おそらく)農家の婦人が「テレビで見てて、いてもたってもいられなくなっただよ……」と、私たちのまえをオロオロと、何か手にもって(ひょっとして食べ物だったのでしょうか)、行きつ戻りつしておられました。

機動隊も手詰まり。なすすべがない状態に追い込まれていました。

このまま、また酷寒の中で激しい放水を続ければ、今夜こそ、闇の中から「死」がその顔を覗かせかねない。

機動隊も、反対派も、その意識がありました。

放水が止んでいました。

そこに新聞記者から情報が入ります。

「1人が体調を崩しているらしい。鉄塔では、1人だけ下ろすという交渉が機動隊と行われていて、機動隊がそれを拒否して全員降りて来いと言っている」というものでした。

反対同盟はここで決断します。

濡れたもの全てが凍り、鉄塔も凍てつく午後9時半。

スピーカーからの新二さんの声が響きます。

「鉄塔死守隊の同士の諸君。これから反対同盟の決定を伝えます。聞こえたら大きく手を振ってください」サーチライトに照らされたシルエットが手を振る。

「機動隊はもう手も足も出ません。反対同盟は勝利を確認し、全員を降ろすことを決定しました。決定に従って降りてください。2日間の闘争、ご苦労さまでした。わかったらもう一度、手を振りなさい」。

こうして半ば凍傷を負い、曲がらぬ手と足で、ゆっくりと4人は地上に降り立ちました。大島はその前に、また一度、ポール先端に登攀し、反対同盟旗をほどいて収納しようとしたように見えました。結び目が凍った旗は、そのままつわものどもの奮戦のあとをとどめました。

降りてくる彼らに、きっと私たちは、叫び続け拍手をしていたに違いないのに、私の記憶では、何か凄まじいばかりに静かな光景として残ります。

「やっと降りてきてくれた」。それが機動隊の感情だったのではないのでしょうか。

機動隊の中には、降りてくる4人を拍手で迎えた者たちもいたのだそうです。(つづく)

NO488 成田空港管制塔占拠40周年「開港阻止決戦って何だったのよ、ドキュメント」

その3前篇

今年は激動と変革の時代、1968年から50年目の年である。50周年を記念して集会や本の出版が企画されているが、もう一つ、1978年の成田空港管制塔占拠から40周年の年でもある。3月25日には、「三里塚管制塔占拠闘争40年 今こそ新たな世直しを！ 3・25」が御茶ノ水の連合会館で開催され、200名を超える参加者があった。

この管制塔占拠闘争に関わったH氏が、フェイスブックで『開港阻止決戦って何だったのよ、ドキュメント』と題した連載を掲載していたが、この連載記事を私のブログに転載させていただくことになった。今まで、管制塔占拠の前哨戦について2回掲載してきたが、今回は最終回の管制塔占拠闘争を掲載する。(転載にあたっては、H氏の了解を得ています。写真はブログ管理者の独断で選んだものを掲載しています。)

※ 3万字を超える長い原稿なので、ブログ掲載の制限のため、今日と明日の2回に分けて掲載します。

【開港阻止決戦って何だったのよ、ドキュメント】その3 前編

★管制塔占拠闘争(1)

今回は、タイトルと少しずれますが、3.26 管制塔占拠闘争のプロローグとして書きます。

1978年2月6～7日横掘要塞戦は大変な反響を呼び起こしました。

新聞は「まるで不死鳥」と見出しをつけて、鉄塔にしがみ付いて放水に耐える仲間の姿を大きく報じました。リアルタイムで放送したらしいTVの映像に釘付けになった人々も多かったようです。わが母も「4人を死なせなかった反対同盟の勇氣に感銘を受けた」と後に語っておりました。

現地の常駐者の一人もこう振り返っています。

(開港阻止闘争として3・26までの)闘いを全体的にとらえると、ここがクライマックスだったと思ってる。これ以上のことはできない。

本当にいろいろ偶然が重なったんだけど、本当に気持ちに訴える闘争っていうのは、俺自身、高校を卒業してから新左翼運動に入って、現闘をやめるまで、あれほど心に訴える闘争は見たことがない。みんなが泣く闘争だったな。

俺らが無線で「元気だったら、手～ふれ～」っていうと、手ふるんだよ。そうすると、まだ大丈夫だとなって。周りでは、反対同盟のお母ちゃんらが、青年行動隊(青行)の幹部連中を囲んで、「もう降ろしてやれ、死ぬから、降ろせ」って、ワンワン泣いてるんだよ。で、「手～ふれ～」って言うと、手ふるから、まだ大丈夫だとなって、朝をむかえたわけ。

4人はメシも食ってないし、一晩中、寝てない。機動隊が来るってわかってたから、徹夜で準備したので、たぶん寝ないでそのまま闘争に入ったと思うんだよね。朝になったら、ぽかぽか、気持ちいい朝になったんだよ。で、「元気だったら手～ふれ～」って。手ふったから、日中は大丈夫だ、みたいになってさ。日が

昇ってくると、全国からちらほらと集まりはじめるんだよ。前田なんかも駆けつけるわけだし。

みんなで、「がんばれ～、がんばれ～」って言うことしかできないけど。それしかできないけれども、放水をあびて凍ったつららを垂れさげて、4人が鉄塔にしがみついているのを、ずうっと見てるわけだよ。それはね、同じものを共有していくんだよ、気持ちの部分で。

そのときのおっかあらがそうだけど、「かわいそうだから降ろせ」っていう気持ちが、今度は機動隊に向いていくんだよ。「おまえら、あれ見て、どう思うんだ。死んだらどうするんだ。まだ放水する気か！」って。で、「あいつらとっしょに闘わなきゃ」っていう気持ちが、現場にいたやつも、テレビを見たやつも、全体でつくられていくわけよ。(『1978・3・26 NARITA』)

この7週間後に、第一期工区の完成のみで開港を強行しようとした空港は「包囲・突入・占拠」され、開港を阻止されることとなります。つまりは、その先端で闘う者は、前年の1977年岩山大鉄塔決戦の準備として生まれ、この横掘部落での闘いで打ち固められたものでした。だから、その人々の集まりは別名を「横掘三派」と呼ばれもしたのです。

「横掘」という地について考えてみることは、三里塚闘争とは何なのかを理解するのに意外に役に立つのではと思います。

要塞が建設された横掘部落は、先に書いたように77年の(岩山)鉄塔決戦のあとから闘いの焦点として浮かび上がってきた地区でした。いやむしろ、反対派が意識的にそこを焦点化していったといってもいいのですが。

成田空港建設反対運動は「三里塚闘争」と呼ばれてきました。「三里塚」とはもちろん地名です。成田市三里塚のことです。成田空港建設計画は、この地にあった「御料牧場」という天皇家の糧食をまかなう広大な土地を中心にして、新しい国際空港をつくらうとしたということです。

空港建設に反対する運動について、あるいはそこに現実的にかかわっている地域全体を指すイメージとして「三里塚」と呼ばれてきました。

「三里塚へ行く」といった場合に、実際にはそれぞれの支援者が向かう小屋がある地区を指し、成田市三里塚ではなく、山武郡芝山町朝倉や、辺田や、坂志岡 etc というのも、だからごくありふれたことでした。

しかし、各部落にはそれぞれの固有の成り立ちがあり、ものごとの考え方、運動の進め方、匂いや雰囲気の違いまであります。

しかも、反対同盟はその違いを互いに認め尊重するという組織であったのです。私は、「左翼の組織より、よっぽど民主的だな」と思うことが何度もありました。

反対運動が立ち上がってすぐ、住民たちの組織は、ごくごくおおざっぱに言えば、多くを空港敷地に取り上げられる成田市側と、主として騒音地区になる芝山町側の組織が合同して、三里塚芝山連合空港反対同盟になります。横掘は行政的な(?)地名でいえば、「山武郡芝山町香山新田」です。

横掘は二期工事区を抱える芝山町の部落でした。ここからやはり二期工事区内にある成田市に属する木の根や、東峰、天神峰も、横掘にほとんど隣接する開拓者たちがつくりあげていった部落です。

これもごくごくおおざっぱに言います。田んぼが古村、畑が開拓。

横掘から南へ坂を下って降りていった先が辺田です。周りを田んぼに囲まれた古村でした。横掘の古村が、辺田のことを「本村」と呼ぶのを聞いて、何かに打たれたような気持ちになったことがありました。いい、悪いではなく、古村と新しい部落の関係が、どきりとする感じで迫ってきたのです。

「開拓で入って食うや食わず苦勞の末に、やっと人並みの暮らしができるようになったとたんに空港がやってきた」という人々の闘いが三里塚闘争と言われ、それはそれで間違いではないのですが、より正確に

いけば八百年、千年の歴史をたどれる古い村(村落共同体)と、開拓の村が独特に結合した闘争であり続けました。敷地内開拓部落は古村に支えられて闘い続けてきたとも言えるのです。

辺田の三ノ宮文男さんが代執行のあと、次々に青年行動隊員に弾圧が及んでいくなかに自殺したときのこと。まだ行方がわからないまま、家族なのか友人なのか、横堀の〇さんを訪ねてきた話もまた、その古老に聞いたことがありました。

「息子が仲がよかったから、来てないかって捜しに来たんだっぺよ」

その仲のよかった友人は、東峰十字路事件(三人の警察官が反対派との衝突で死んだとされる事件)で、うそっぱちの調書を取られた人でした。この調書は、のちの裁判で最大の争点のひとつになり、〇さんがその調書を否定することで、裁判の展開は、事実上の勝利へ向かって、大きく流れが変わっていきました。

「三里塚闘争に連帯する会」などが、現地の結集・宿泊に利用した施設「労農合宿所」は、この〇さんが横堀を去ったその宅地跡に開設されたものでした。

横堀は、横堀要塞を建設することで、そんな人の命や三里塚闘争の歴史を結び合わせる地だったのです。

ここで公団・機動隊と要塞を巡ってせめぎあうことで、その主力を担った「三里塚闘争に連帯する会」や、第四インター、プロ青、戦旗のブロックが固められ、「横堀赤ヘル三派」と呼ばれる管制塔占拠闘争の部隊が作られていったのでした。

三里塚開港実力阻止！ 福田自民党政府打倒！
3.26~4.2全国から三里塚決戦へ

**反対同盟と要塞戦士の闘魂にこたえ
決戦に猛然と決起せよ**

欠陥空港を包圍・占拠し開港を粉砕せよ

腐り切った福田自民党政府を打倒せよ

**3.26~4.2
開港実力阻止！ 現地連続闘争**
(場所) 三里塚
現地連絡先 朝倉靖雄(0477-977068)

三里塚を闘う **全国青年共闘・高校生共闘・空港粉砕全国学生共闘**
連絡先 新時代社 03-451-2818

★管制塔占拠闘争(2)

1978年開港阻止決戦は、3月26日の現地集会から開港日となるはずの4月2日にかけての長期闘争として、多くの支援者には伝えられていました。むろん、1日目1発目で決めてしまうという計画を知っていたものもありました。

機密保持はまあ当然でありましょう。

三里塚闘争に連帯する会系の支援者の中で、党派部隊に属するものは、大方、前日の25日までには現

地に入っていたはずで、地方にいる者は、24日に現地へ向けて出発する者が多かったのです。24日、25日と見事な月夜でした。しかも24日はその月がきれいに欠けてしまう月食でした。「月夜に釜を抜かれる」というのはありますが、やってみせます！月夜にカマトンカチ！この月食のひとつときを利用して、要塞へ最後のブツが搬入されたのでした。

要塞は、例のごとく「航空法違反」物件になる可能性がありました。実に不思議に間抜けに、機動隊は「6mの要塞に3mの塔が立てば高さ制限の9mを越える。ゆえに3m以上の建設資材は運び込ませない」ということでした。

でもね、つなぎゃいいんです。そんなものは。

というわけで、鉄塔を立ち上げる資材は、検問を潜り抜けて数日間のうちに運び込まれて、準備は整っておりました。

一方で、支援者がやってくる横堀の労農合宿所には、とてつもない物資が送られてきていたそうです。衣類、バス、トラック、冷蔵庫、医療品 etc 全国から来る物資が山積み。

大方のメンバーは片道キップのつもりでしたから、身辺整理をして、近親者があとで読むことになる、お手紙なんぞを残して現地へと向かったのでありました。

管制塔へ向かうプロ青の中川のおっさんは「無事に帰ってきてね」というテーブルの上の妻の手紙に、特別任務につく自分のことを何も語らず、ぼろぼろ涙をこぼしながら「ただ人民のみが歴史を動かすのです」と返事の置手紙。かあ、俺も泣けるぜ。

泣きたい人は、どうぞまた『三里塚のイカロス』を見てください。

同じく戦旗派の水野は、現地へ向かう車の中で、キャンディーズの最後の名曲「微笑返し」を「おしっこの仕返し、だって、わははは」と笑っていた。んなこと言ったって、自分がこれから長いところへの「お引越し」なんだよ。

さ、後楽園キャンディーズ解散の動員力と人気に負けてなるものか！

行くぞ、決戦の地、三里塚。

ヅカへ、ヅカへ、と草木もなびくよ～ あらあらあらさつと。

★管制塔占拠闘争(3)

1978年3月25日、三々五々、現地へやってきた支援者は、それぞれの団結小屋に入っていました。インターは空港南側に位置する朝倉、プロ青、戦旗は横堀の小屋です。

まず、のんびりとした春の日でした。ぽかぽかしたいい陽気なのです。

朝倉小屋の草の上に多くの支援者が寝転んで草などはんでいるのでありました。

一方、横堀はまた空港反対派の挑発が始まろうとしていました。

午後1時、横堀要塞にまた鉄塔が立ち上げが開始され、夕方には完成してしまいます。

長さ3m鉄材の制限の陥穽におっこちた警備側には、頭に血が上った指揮官が出てきてくれたのでした。まことにありがたい話でした。

長い会議の末に「違法行為を看過すべきでない」という強硬論が「警備が空港と二分される。いまは要塞に手を出すべきでない」という冷静な判断を押し切ってしまったというのです。

インター朝倉では部隊編成が行われます。小隊、中隊、大隊。そして0部隊。

このゼロがなにしろ怪しいよ～。

たぶん、その部隊がいくつかに分けられて、特別任務隊になったのだと思います。

管制塔と9ゲートトラック突入部隊は、ここにいたわけでは。

あららら、やばっ

前田が出てきちゃったもんね。

「みなさん、死んで頂きましょう、というやつです」と第一声を発しました。

(ばかやろ！)

その数 15 人。日が落ちてから朝倉団結小屋の一室で「共謀」が行われました。

このとき、初めて翌 26 日の全体計画が現場メンバーに明かされることになったのです。

空港に突入し、管制塔を占拠する戦術は、指導部のごく一部しか最後まで知らなかったはずで、現場に向かう「兵隊さん」で知っていたのは、この時の「共謀」のメンバーくらいではないでしょうか。

たとえば戦旗の 3 人は、横堀の熱田さん家のマデヤ(作業場兼ものおき小屋)の軒先で、前田から説明を受けるまで、内容をまったく知らされていなかったと記憶します。

地下足袋姿の私達は、首に安全靴をぶら下げ、許される範囲の「あらゆる武器」を抱え込んで、月光のもと熱田さん宅から畑の中を駆け抜け、田のあぜに伏せて、ようやく所定のマンホール突起口というやつに取り付いたのです。

この時点でインター15、プロ青4、戦旗3、計22名。南ベトナム民族解放戦線、アメリカ大使館占拠部隊のアナロジーでありました。

夜陰に乗じて、(といっても月夜であったのですが)、空港内に通じる排水口に入り込もうという計画です。でも、そうはうまくいかんのです。

7ゲートを警備していた機動隊のサーチライトがくるくる回る合間を縫って、人とブツがマンホール内へ入っていきました。そのライトは、月夜に動く影を捉えて、ぴたりと突起口を照らして動かなくなることしばしばという状態に陥りました。

ついに機動隊がやってきて、半身を突起口に入れていたS君が追いつかれて逮捕、中に入っていたのが15人。後は一目散に遁走し、田んぼの水にどろどろになりながら、逃げのびたのです。

これより管制塔組は、空港内の出口近くまで進み、真っ暗闇の中、入ってくるかもしれない機動隊を警戒しながら、翌日の突入時刻を待つことになりました。

正直言えば、この時間がいちばんきつい経験でした。

私(平田)は、「直ちに突入すべき」と隊長・前田に進言すべきかとも思いました。出口を機動隊が察知して押さえる前に、出て勝負すべきではないかと。

そう主張しなつたのは私に勇気がなかったとも言えますが、前田の判断に従うのが最善だとも思ったのです。実際、彼の判断が正しかったのです。

前田は「撤退する道はない。予定通りの時刻に予定通りの場所から出て、管制塔を目指す」と、まったくブレがありませんでした。

連絡に使用するはずだった無線機をハンマーで破壊し、私たちは退路を絶ち、自らを闇の中の「突撃の意志の塊」に追い込んでおりました。

そのころ、外の無線は「予定通り決行！」と流しつづけていたそうです。

★管制塔占拠闘争(4)

3月26日朝、外はきれいに晴れ上がっていました。

管制塔占拠部隊はまだ排水溝の暗黒の中。部隊を組みなおします。

当初予定した22人が15人にメンバーが減っていました。確かこれを5人ずつの3グループに分けたはずで。

持ちこんだ武器は整理されました。とにかく身軽にして、一気にマンホールから飛び出して勝負できるならしようということでした。

入り口で忍び入るのを見られている以上、出口では機動隊が待ち構えている可能性が高いと考えたのです。

鉄パイプ、大ハンマー、そして触発性の火炎瓶。あとはすべてマンホールの中に置き去っていくか、排水溝の口から小見川へ捨て去ったはずですが(置いていてもよさそうなものですが、そうもいかないものもあったのです)。

午後1時が迫ってくる。「いくぞ！」の声の直前。まだ、党派が違う人間はよく知らない間柄ですから、それぞれの党派で声をかけていました。

プロ青が凄い。

「死んでもお互い、恨みっこなしだぜ」

津田のセリフであったそうです。津田は夜にひどく目が見えづらかったのだそうで、このマンホールに至る間に田んぼに落ちこちて、おろおろするのを中川のおっさん達に「お前、帰れ！」「いや、連れていってくれ。頼むから」と、やってきていたのです。

15人は一列になって、マンホール内の小さな鉤型の手かがりを伝って数メートルを登り、丸い、横に伸びる側溝に這いこみます。ここにきてようやく数時間ぶりにうすぼんやりとした明かりを見ることができました。

後ろからブツが送られ、それを出口になる集水口の向こうに伸びる側溝へ押し込み、最初に飛び出す先頭の藤田がその集水口の真下に位置しました。

時計を見て、飛び出す時間を量る。……しかし、不思議なことがあります。このとき、二番目に位置した平田は、後方から前方へ頭上を通りすぎていく人の話し声を聞いているのですが、藤田にはその記憶がないといえます。

午後1時、藤田はバールで集水口の基盤になった鉄の蓋を押し開けようとしています。

うまくいきませんでした。やがて彼はヘルメットを脱ぐと、慎重にバランスをとっておでこと両腕で、立ち上がりざま一気に持ち上げたのです。

★管制塔占拠闘争(5)

すぐさま飛び出した藤田は「牧歌的な状況」に驚いたと言います。空にはひばり、出口すぐそばにある信号機のカチカチという機械音を聞いていました。

二番目の平田はその声、音を聞いていません。本当に人間がある状況の中で、認識するもの記憶するものは、恐ろしく個人差があるようです。

飛び出す瞬間、集水口のふちで切り取られた四角い真っ青な空だけが見えました。ただ青い空にまるで逆さに飛び込むように、伸び上がって、私たちは地上に出たのです。

5人が出てから、隊長の前田がブツを下から必死に上に持ち上げて、先の5人に手渡していました。

ブツのあとに、残りの10人のメンバーが次々に出てきました。時間との勝負でした。そこに制服の警察官5,6名が小走りにこちらへやってきたのです。

手を震わせながら、銃を構えて。

飛び出す直前に、頭上数十センチメートルをゆっくりと通過していった、話し声の男たちに違いありません。

先に出たものは、仲間が出てくるまで、警察官と5、6mの距離で対峙しながら、時間を稼いでいました。前田は排水溝から出てくる人数を数えていたといえます。

最後の中路はまだ体半分しか地上に出ていませんでした。

管制塔組は半円に囲む警官を一気に蹴散らして突っ走りました。と、いってもどの方向か事前にシュミレ

ーションしていた前田以外、他のメンバーは全然分かりませんから、「こっちだ！」の声に従うほかになかったのです。

ただ、制服警官は、管制塔組が走り始めたとたんに「い、いかん！」と絶叫したのです。

そう、俺たちが向かうのは管制塔。

★管制塔占拠闘争(6)

制服警官は、疾走する管制塔組に「止まれ！ 止まらんと撃つぞ！」と並走しながら叫んでいました。むろん、拳銃はこちらに向けられたまま。

前田隊長が、片手に持つ火炎瓶の投擲フェイクを入れつつ、行儀の良くない殺伐としたご挨拶を脇にいる警官に送りつつ、先頭グループを引っ張っていました。

最後に排水口から出てきた中路は足が速かった。大ハンマーを掲げると、あっという間に先頭グループに入っていました。

むろん、前田とともに千葉で活動してきた児島は、約束通り大ハンマーを掴んで、前田の側を離れませんでした。

他の連中が手にしていたのは、鉄パイプとバール、火炎瓶のセットということになります。

殿を受け持つ形になったのは、中川・原のプロ青同コンビでした。遅れるはず、中川は欲深く3本も火炎瓶を抱え込んでいたのです。

管制塔がそびえる管理棟敷地内に入ってすぐ、そこを他の地区と仕切る金網の扉を原が叩きつけるように締めたそうです。二人は自分たちが最後尾であることを自覚していたということになります。

こうして、追ってきた警察官を置き去りにした上に、入ってこようとしたところに、中川は2本も火炎瓶を投げつけて退かせています。

先頭はもう管制塔へとまっしぐら。

その行く手に黒煙が上がっていました。次の瞬間、地面に横たわる誰かに暴行を加えているかのようにみえたガードマンが、何かを放り出して、まさに脱兎のごとく全速力で逃だしました。

突っ走る15人の目の前に、異様なものがいきなり立ち上がりあがりました。消火液をかけられ真っ白になった人でした。

1時きっかりに、9ゲートから突入したトラック部隊のメンバーです。

トラックに積んであったガソリンに引火し、それが燃え移って全身を焼いた仲間です。

あとから思えば、警官が放り捨てたのが消火器だったのです。でも、その時点で、何が起こったのか、突っ走る管制塔組の誰も理解していなかったようです。

9ゲート部隊のメンバーも、管制塔組の後を追ってまた走り、管理棟の中で逮捕されたといえます。

管理棟1階に管制塔組が走りこんだとき、警備本部は解体したようです。9ゲートからトラック2台で突っ込こまれ、慌てふためいた警備本部がやや持ちなおして、ふと心理的な空白ができていたのではないかと思います。

そこへ2撃目が加えられることになったのです。

その瞬間に警備本部のえらいさんたちは、蜘蛛の子を散らすように現場から逃亡したのです。管制塔組が突入した管理棟1階(ロビー)の真上、2階の空港署に警備本部が置かれていたからです。

1階ロビーで津田の両手をあげての「撃てるもんなら撃ってみろ！」の弁慶ごっこを先頭に5人が警察官と対峙して頑張る間に、10人がエレベータに乗りこみ、上へと向かいました。

こうして、管制塔占拠が開始されていったのです。



★管制塔占拠闘争(7)

私達が管制塔に突入する前日の3月25日夜、インター朝倉団結小屋の一室で管制塔攻略組15人に明かされたプランは、26日の午後1時を期して、私達排水口から管制塔を目指すもの、第9ゲートから2台のトラック部隊(8人)、そして8ゲートから入ってくる大部隊の3方向から闘いを行うというものでした。9ゲート組と管制塔組の時間のズレはあったものの空港内で出会いました。火だるまになった9ゲートの仲間のおかげで、管理棟正面玄関のシャッターが開き、そこから管制塔占拠部隊は管理棟に突入したのです。

警部本部にいた幹部たちは、自分たちが襲われると思ったようなのです。

むろん、私達にはそんなつもりはまるでなく、とにかく管理棟の上に立つ管制塔のてっぺん、管制室をただひたすら目指していました。

管理棟に走り込んだ時、エレベーターから血相を変えた男たちが次々に降りて、「避難」していきました。私はずっとそれらの人々を、新聞記者だと思ってきたのですが、ことによると、警部本部づきの偉いさんたちだったのかもしれない。

その男たちと入れ違いになるようにして、最初の5人がそのエレベーターに飛び乗りました。

これが管制室に入っていく任務を持っていた前田達の隊でした。ここには隊長のインター・前田、プロ青のリーダー・太田、戦旗派のリーダー・水野、前田の側を離れない大ハンマーをぶら下げた児島、藤田の5人でした。

こうしてみると、前夜、22人のメンバーが15人に減って、それでも3つの任務で隊を編成して、管制塔を落とすという編成とメンツは、結果として根本的には変わっていません。つまり警備を先端で破る役割、周囲を払い占拠組を守る遊撃隊、占拠するメンバーという分け方になっており、占拠する主力が真っ先に駆けていったところが違っていました。なかなかうまくいっているのです。なぜか、ひとりだけ勝手に管制室に入って行って、Vサインなど挙げていたおっさんがおりましたが。

ロビーに最後尾で走り込んだ中川は、阻止線の向こうのエレベーターが開いていることを認めて、「乗れ、

乗れ！」と叫びます。前の阻止線をすり抜けて、そのエレベーターに走り込んだのでした。それに乗り込んだ誰もが、自分たちの背後の扉が開いていることに気がついていませんでした。

警察官が投げつけた消火器を阻止線の仲間が避けた。エレベーターに向かって床を滑ってくる。中に飛んできると思った瞬間に扉はしまり、その衝撃を受けて2台目のエレベーターは上昇し始めたのでした。1階ロビーのエレベーターの前に居座り、上に登っていく仲間を守り通した5人の仲間たちは本当に見事でした。

三里塚に来るのに「俺がやるしかないよなあ」と特別任務を引き受けたというプロ青の原、現場で「撃てるものなら撃ってみろ！」と叫んだ津田、5.8 闘争で放水車の上に立って旗を振っていたインターの高倉たちでした。

ロビーで発火した火炎瓶の炎と煙の中で、彼らは警備の暴行を存分に味わいました。押っ取り刀でやってきた警察官や機動隊に、火炎瓶で抵抗したあと、街路樹の添え木の丸太や消火器で殴られたり蹴られたり、拳銃で脅されながらも、登っていく占拠部隊を上へ送ってくれたのでした。

逮捕される直前に彼らが交わした言葉は、

「上にあがったよな」「確かに行った。あとはやってくれるよ」だったそうです。

★管制塔占拠闘争(8)

管理棟を上っていく2台目のエレベーターに乗ったのは、インターの小泉、中路、平田、プロ青の中川、戦旗の山下でした。先に上がったエレベーターの5人と合わせて、10人が管制塔に登ることになったのでした。

管制塔は、7階建て管理棟(管理ビル)の上に聳えていました。そして、いま思うに、エレベーターは管理棟最上階までで、直通エレベーターはなく別のエレベーターに乗り換えなければ通信施設の部屋と管制室にはいけなかったのだと思います。

みなさんが写真や映像できっと見たことがあるだろう赤旗の下がるベランダが14階です。このベランダの奥に、マイクロ通信施設がありました。そして、てっぺんが16階の管制室でした。

1階ロビーから14階と16階に至る道筋については、記憶をたどっても間違いのない事実として、語れるほど判然としていないのです。ただ、管制塔占拠から9年後に、すでにシャバの人間になっていたものたちが集まって、何度も記憶をたどったり討論する場を持ちました。『管制塔、ただいま占拠中』(つげ書房刊、10年記念)出版を目的にしたものでした。というわけで、平田の記憶と『ただいま占拠中』を照らし合わせて、これから書いていきます。

事実として、先に上った5人を追い越して、後のエレベーターに乗った5人は14階に達しました。後発のエレベーター組は、うまくエレベーターを乗り換えたのでしょう。扉にいちばん近いところにいたわけではない平田が、14階には最初に到達しているのです。おそらく乗り換えるときに、先頭(扉際)に位置することになったのです。平田は、2度目にとまったエレベーターから先頭(だったと思う)で飛び出しました。ここが13階でした。今度は階段を目指しました。

途中のエレベーターホール脇で、職人さんスタイルの男の人が突っ立ってるのに出会いました。ここがたぶん13階エレベーターホールでした(『ただいま占拠中』では、エレベーターを乗り換えた7階と書いてあります)。

人間というのは本当に不思議です。彼は騒ぎもせず、ただ黙って壁のほうを見つめていました。「そこにいるのだけど、いない」という存在のしかたなのでした。中路には彼がキョトンとこちらを見る目が印象に残ったといえます。その背後を駆け抜けて、階段を全速力で上り始めました。

それより、数分前、前田たち5人が飛び出した階は7階だったのでしょうか。正面にオフィスらしきものがある

り、開けっ放したドアの向こうでデスクから離れて、窓際に張り付いた人々を見えています。ちょうどエレベーターに向かおうとした女性二人が、絶叫して顔を覆い腰をかがめて部屋に戻ったといいます。

「俺は何か悪いことをしてるのか？ 世間ではこういうのを犯罪と呼ぶんだ」と、あられもないことを思ったそうです。赤いヘルメットに手に手にハンマーや鉄パイプの連中が闖入してくれば、人々はそうなります。すみません、やまにやまれぬ犯罪です！

ここから、彼らも階段を駆け上ってくることになります。

13階から14階、いや中二階構造の15階まで、平田たちは駆け上ります。平田は行く方向に塞がる扉、ノブを回しながら身体をぶつけていました。いくつかそうやって当たっていったのですが、ドアはまったく動きませんでした。

ただ、ひとつの部屋の扉を除いて……。

★管制塔占拠闘争(9)

どうやら15階入り口だったらしい扉はビクともせず、平田とその後ろの数人は短い階段を下に向かってとって返します。さあ、ここらへんからドタバタ・てんやわんやの連続になるのです。

14階に駆け下りて、またしても扉にむなしい突撃を繰り返すことになりました。

でも、そこになぜかふわりと扉が開いている暗く小さな部屋を発見したのです。

何だか大きな機械が天井近くまでしつらえてありました。むろん、それが何の機械かさっぱりわかりません。

部屋の入り口で半身ほど中川が平田より先にいたと思います。

中川は「ここは俺がやる！」と言うが早いか、なけなしの火炎瓶を放り込みます。火炎瓶は沈黙したままでした。

平田は火炎瓶を使用することに躊躇しました。ここが管制室でないことははっきりしている。下からは間もなく機動隊が上がってくる。瓶を持っていたかったのです。

いっさいお構いなしの中川は、左後ろにいた平田の手にある火炎瓶を奪い取るようにしてまた投げつけました。こたびはめでたく炎が上がり、煙がこの小部屋に充満しました。

何がめでたいものやら、ここに満ちた黒煙は14階廊下に湧き出し、てんやわんやの突入部隊を噓せさせたのです。

さて、おそらくそれよりほんの数分前、この部屋で何が起きていたのか。

一緒に13階まで上がってきた中路は大ハンマーを抱えていて、少し遅れ気味でした。彼もいくつかの開かないドアにハンマーを叩きつけていました。ノブだけがグニャリと曲がったそうです。

そして、この扉、「マイクロ通信室」と書いてある部屋の前に立ったのです。中路にとっては、この文字は馴染みがありました。三年間もマイクロウェーブ関係の仕事をしていたのです。ただ、上を先に目指したために平田たちがすり抜けていったこの部屋だけは、鍵がかかっていませんでした。

中路は部屋に入り、機械にハンマーを振るいました。機械がへこんでいく手応えを感じながら何度も何度もハンマーを打ち付けたといいます。

この時、この機械が作動していたのかどうか、中路は確認していません。このことが後の裁判で「航空危険罪」の大きな争点になるなんて、考えつくわけがありません。

それに中路は、「動いているって知ってたってよ、壊しに来てんだもんよ。やるに決まってんじゃねえか」と、またあの不気味な笑い声を法廷で漏らすのでありました。

中川の奮闘ぶりも、平田の慮りも、すでに中路がオシャカにした機器を相手にしていたわけで、あまり意味のあるものではなかったのです。

5人がてんでにてんやわんやのさなか、下から激しい勢いで足音が上がってきました。平田は階段の手すりに身を乗り出して階段下を覗き込みます。

(ばかやろ！ 瓶がねえよ。この階段でパイプ使って肉弾戦かよ……)。

★管制塔占拠闘争(10)

凄まじい勢いの足音は、やがて3つの真紅のヘルメットの頭頂部となって現れました。一度反転すれば、すぐに平田たちのいるところへ辿り着くことになります。前田と児島(純二)、そして水野でした。

平田は正直ほっとしたのですが、それでもそれを追って鋸つき濃紺ヘルがやってくるかもしれない。そうなれば、どこかで機動隊を止める位置を確保して構えなければなりません。

打ち合わせをしたわけではありませんが、この前田たちを上にするために、どうするのかを、先に14階でジタバタしていた連中は思ったのに違いないのです。ひょっとしたら、同じように、3人に遅れていた太田、藤田は後方を確認しながら上がってきていたのかもしれない。

前田を先頭に上がってきた3人は、やはり15階扉へまっすぐに向かいました。扉の前で前田が叫びます。

「純ちゃん！ ここ！ ここ！」。

前田の脇にさぶらふ大鎚おのこ、児島は腰だめに大ハンマーを振り回しました。ガンガン何度も何度も。前田は叫ぶ「開けろ！ 開けんか。汚えぞ！」

どうやら人が扉の向こうに人がいるらしいのでした。それにしても「汚い」とは(笑)、同意するにはわが立場からしても難しい。まあ、お互い必死の場面です。お許しくださいませ。

このとき、16階管制室からこの15階扉に向かって椅子やデスクが投げ下ろされていました。

14階先行組が身体をぶつけても開けられなかった扉は、2度目のアタック、児島の大ハンマーをしても開けられませんでした。

「上に行けないのなら、どこかを確保して占拠だ」と声が上がり始めます。このときには遅れていた太田、藤田も合流していたと思います。

そしてまた、14階をてんでにてんやわんや、行きつ戻りつ、占拠できる場を探したのでした。

敵中に飛び込む強襲は、混乱に乗じる時間での勝負だということがよく分かります。アタックしながら、また逃げなければならないのです。前に進む道を切り開き、後ろから追ってくる者との間を取って、アタックするということになります。

しかし、管制塔の中ではおよそそんな余裕を作る闘いは無理でした。

もし、前夜、排水溝の中で廃棄してきたガスカッターをここに持ち込んでいたら、それに因われて15階扉前に釘付けになりかねず、管制塔アタックは成功しなかったのでは思うことがあります。

何しろ小泉が死ぬような思いをしながら、田んぼの畦道を背負って持ち込んだ30キロもあるボンベの付いたガスバーナーのカッターでした。そいつで15階扉の鍵を焼き切って侵入しようというのは土台、無理な話でした。準備したある他の武器とともに、このガスバーナーは占拠プランのお笑いというところだったでしょう。

「占拠、占拠！」の合言葉でうろうろ、機動隊の影がちらつきはじめ、焦りが募ってきた所に、小泉が叫びます。

「ここから、出られるぞお！」。

前田が15階から駆け下りながら指示しました。

「出ろ、出ろ！」

小泉が長身を折って外に出ました。残りが一気にその方向に向かいました。小さな鉄の扉の出入り口でし

た。
「マルキ」の声に児島に外から火炎瓶が渡され、放りますが不発。それでも後退した機動隊が上を伺いつつ上がって来ようとするところに、中川がペンキ入りのバケツをそのまま投げ落としました。

殿の山下が、半身を外に出したまま、火炎瓶を渡されて階段下に向かって放る。一気に炎が燃え上がりました。扉を締めて、間一髪、全員外。

ペンキ入りのバケツは、あの 13 階で出会った「そこにいるようで、いない」の職人さんの道具だったのだと思います。

そこは 14 階のベランダでした。屈んで鉄の扉を出れば左に大きなパラボラアンテナが置かれ、下を見れば管理棟の屋上、そして、目を放せば青空と空港周辺をみはらかすバルコニー。その舞台に、赤いヘルメットの 10 人が姿を現しました。

……みせばやな 児島のかいなと鎚だもん 振りにしふって 魂はかわらず



★管制塔占拠闘争(11)

身を屈めて潜ってきた扉には、鉄パイプでつかえ棒がされました。14 階内部に通じるこの扉が機動隊によってガンガン叩かれるようになるのには、少し時間がたってからでした。最後に投げたペンキに火炎瓶の火が移って、数階下から階段を噴き上がったのが効いたのだと思います。その前から機動隊は瓶を警戒して、上を伺いながら慎重に間を詰めようとしていました。

プロ青の太田と戦旗の水野が手すりにそれぞれ「先鋒隊」と「戦旗」と赤地に白く染め抜かれた旗を垂らしました。反対同盟にとっては、怨嗟的だったシンボル管制塔に、反対派の旗が翻ったのでした。

口惜しいことに、そこに反対同盟の三輪旗を飾ることができませんでした。第四インターのツチカマ旗もです。そのわけはもう少し先で語ることにします。

ベランダから横堀要塞方向を眺めていた数人が「来た、来たぞ！」とざわめきました。ベランダに身を乗り出して右方向をみると、数百の赤いヘルメットの隊列がゆっくりと空港に向かって来るのでした。

この部隊は、午前 10 時に菱田小学校跡地で決起集会を行い、辺田、中谷津、一畝田とおよそ 10 キロも延々と迂回して、空港第 8 ゲートにまっすぐに入ってくる道のある松翁交差点に姿を現したのです。管制塔占拠組がその姿を認めたのはこの時でした。

彼らは横堀要塞と山林を隔てた東側、つまり管制塔との間に横堀要塞を挟む道を通ってきたこととなります。

横堀要塞は、2 月に続いて再び鉄塔を立ち上げて戦闘に入っていました。

横っ腹に「いまぞ起て、減反に苦しむ百姓も、大義を樹てる春はきた」という反対同盟の横断幕と、幾多の赤旗で身を飾っていました。この挑発を警備側は見過ごすことができなかったのです。

さて、3月26日当日、この開港阻止決戦のプランナー和多田は、岩山部落の台地に建てられた小さな小屋におりました。インター系の学生共闘が鉄塔決戦に備えて作った小屋のはずです。他にやはり管制塔占拠の計画を知っていた指導メンバーがそこには詰めていたようです。

午前11時、某ホテルから和多田に連絡が入ります。屋上から空港内を偵察していたメンバーが「警備部隊が第3ゲートの方に動いていった。空港内はガラ空きである」というのものでした。第3ゲートは、反対同盟主催の集会在予定されている三里塚第一公園からまっすぐの直近のゲートです。公園には少なくとも数千人規模の参加者が集うはず。警備がそちらに差し向けられたのでした。

実は、その前日に新聞記者から、警備方針で警察内部に対立があるという情報もたらされていたそうです。それを聞いて「もしかしたら」と思った和多田の見込みがまんまと当たったのでした。警備は精強の千葉県警機動隊を横堀要塞に差し向け、おまけに第一公園の集会・デモ警備に残りの部隊を投入したのでした。

和多田たちは、第8ゲートの部隊指揮者とは無線連絡を取っていましたが、管制塔攻略部隊とはまったくやりとりができない状態でした。

前夜、排水溝侵入時に機動隊に発見されたことがあって、排水溝内で無線機をハンマーで潰して無線を遮断していました。

「ヒラタよ。あの日の闘争はもう信じられないような偶然の重なりばかりで、とんでもなくうまくいったのだから、あんまりカッコよく書くんじゃないよ」の和多田の言に従って書きます。

カッコ悪いことはこれからたくさん出てきますが、ここでは、あの無線機は地下に入ると通じなかったという話だけ記しておきます。それでも、和多田たちは「予定通り、決行」と流し続け、前田は地下排水溝でそれを聞き取らずに、やりとりの傍受を警戒して無線機を潰していたのです。管制塔に持ち込まなかったガスカタターとともに、ドジがいい結果を生んでいるのでした。

14階ベランダで、空港へ向かってくる赤い部隊を発見して、前田が騒ぎます。

その部隊に向かって、みんなでシュプレヒコール！

「管制塔を占拠したぞお、開港を阻止するぞお！」。

振り向くや、「俺たちは、ここにカンパニアに来たんじゃないぞ。管制室に行くぞ！方法を探せ、管制室に行くんだ」

ああ、そしてまた、このベランダでうろろうばたばたが始まったのでした。

★管制塔占拠闘争(12)

管制塔占拠組が、空港に向かってゆっくりと進んでくる隊列に向かって、シュプレヒコールをしているとき、当然、隊列の方も翻る2つの旗とその後ろでパイプを振っている人影を発見しました。

手すりをガンガン殴りながら、手を振る管制塔組に、ゆっくりと進んでくる隊列も、やがて猛烈に手やパイプを振って応えるようになりました。

けれど、インターの指揮者は、こんな会話をしたといえます。

「おい、俺らの旗がねえじゃねえか？プロ青と戦旗が占拠したのか？」

「いいや、間違いなくあそこにいるのの半数は我が派だよ。また、旗を忘れたんだろうよ。ありそうなことじゃねえか。日韓の時のことを思い出してみろよ」

数年前の日韓閣僚会議粉碎闘争ってやつです。

外務省に突入したはいいが、そこに立てるはずだった南ベトナム解放戦線旗やら槌鎌の素敵な「大漁旗」を、お忘れになったのです。

こたびは、前夜、排水溝侵入口に入り損なって、田んぼの泥まみれになりながら、小屋へと逃げ帰ったメ

ンバーの腹に、反対同盟旗とインターの旗は巻かれていたのです。

8ゲート部隊はずいぶん予定の時刻(午後1時)から遅れていました。他にも戦旗派にご事情があったようです。準備していたブツを、前日にすっかり機動隊にもって行かれてしまったのだそうです。後に名を挙げる「水野・山下精神」も、木材を鉄ブツに変える力があるはずありません。

8ゲートの部隊の動きについて、『1978・3・26 NARITA』(ゆい書房 2008 年刊)で語っているのは部隊を率いたインターの大隊長・中隊長。現場ではなく無線で指示を与えていた青年共闘(インター系)の大門、そして、今も称えられる勇士、プロ青の大森さんです。

佐々木●8ゲートの部隊のなかで、「横堀要塞前から突撃開始して午後1時に8ゲートを突破」ということを知っていたのは、(無線で本部から指揮する)大門と連絡をとっていた大館だけ。だから、大館は焦るわけだよ。

大森●僕たちも急げ、急げと言われたが、時間を教えてもらっていない。現闘だから道は知っているから、これだけの大部隊が、あの細い道を簡単に通れるはずがないこともわかっている。戦旗派の武器が到着しなかったのは、前日に山をガサ入れされて鉄パイプを持っていかれてしまったので、やむをえず角材に変えた。これが部隊と武器とのドッキングが遅れ、角材という10年前のスタイルで戦旗派が登場した理由です。俺たちは前日の警察無線でそのことを知って、戦旗派は明日、どうするのだろうと心配していた。

大門●要塞に籠城していた現闘責任者は、午後1時に3方向から戦闘が始まることを知っていて、チャンスがあれば、できるだけ機動隊を要塞に引きつける作戦行動をとることになっていたのだが、「1時になっても8ゲートに部隊が到着しない。計画変更ですか」という連絡も入ったりした。

佐々木●けっきょく、30分くらい遅れたね。横堀要塞周辺の出発地点に30分遅れで到着したとき、管制塔付近から煙が上がっている。

大森●精華学園でいったん止まって、あの細い道を出た丹波山のところで部隊が勢ぞろいした。私の任務は「突っこむときに先頭にいればいい」ということで、第1中隊の第1小隊長。京都にいるAとIが、前年の5・8から交互に指揮をとっていたのですが、Aと僕と、インターからは3~4人が出てきて、「今日は頑張ろう」と丹波山で握手をしたのは覚えています。そのときの意思一致は、「今日は突っこむ」。先鋒隊で言われたのは「今日は引かない」ということだけです。陽動作戦がちょっとでも頭に入っていれば、考え方は変わっていたと思います。

佐々木●陽動作戦といっても、進んでいけばどこかで機動隊の阻止線とぶつかる。そのときは引かない。とことんやりぬく。しかし、それで空港のなかまで行きつけるという想定は、少なくとも僕の頭のなかには全然なかった。

大森●途中にバリケードがいくつもあるのは知っていたから、空港のなかまでいけるとは思っていなかったよね。

佐々木●8ゲートに至る途中で、機動隊と大乱戦になるはずだった。

大館●それをやらないかぎり、管制塔部隊は上までいけない。中隊長クラスまでは、みんな、そう考えていたと思う。

高橋●想定では、8ゲートのはるか手前で白兵戦になるはずだった。ところが行けども行けども白兵戦にならない。どんどん進めてしまう(笑)。

大森●空港を作るための砂利の山が、あちこちにいっぱいあって、そのあいだを行進していった。途中に開けたところもあるが、その場所にはバリケードもなければ機動隊もない。(『1978・3・26 NARITA』)

先に書いたように警備側は精鋭を横堀要塞に送り、警視庁他の部隊を第3ゲート方面に向けてしまっていました。あとは空港内に制服警察官と多くない機動隊が置かれているだけの状態になっていたのです。その状態で管制塔を占拠され、空港内に置かれた警備本部が解体してしまっただけからは、もう警備どころじゃなくなっていたのです。どこにどう部隊を配置するのか、どう動かすのか、機動隊の側はやりようがなく大混乱に陥っていたのです。

8ゲートからの大部隊がしずしずと進んでくるなか、管制塔14階ベランダでは、前田の「管制室に行くぞ、方法を探せ！」の音が響いていました。

一人のメンバーが、ベランダに設えてある大きな「お椀」を見上げたのです。

(明日の後編に続く)

※ 管制塔占拠闘争を報じた第四インター機関紙「世界革命」号外(1978.3.27)をホームページにアップしました。

下記アドレスからご覧ください。

<http://www.geocities.jp/meidai1970/kikanshi.html>

N0489 成田空港管制塔占拠40周年「開港阻止決戦って何だったのよ、ドキュメント」

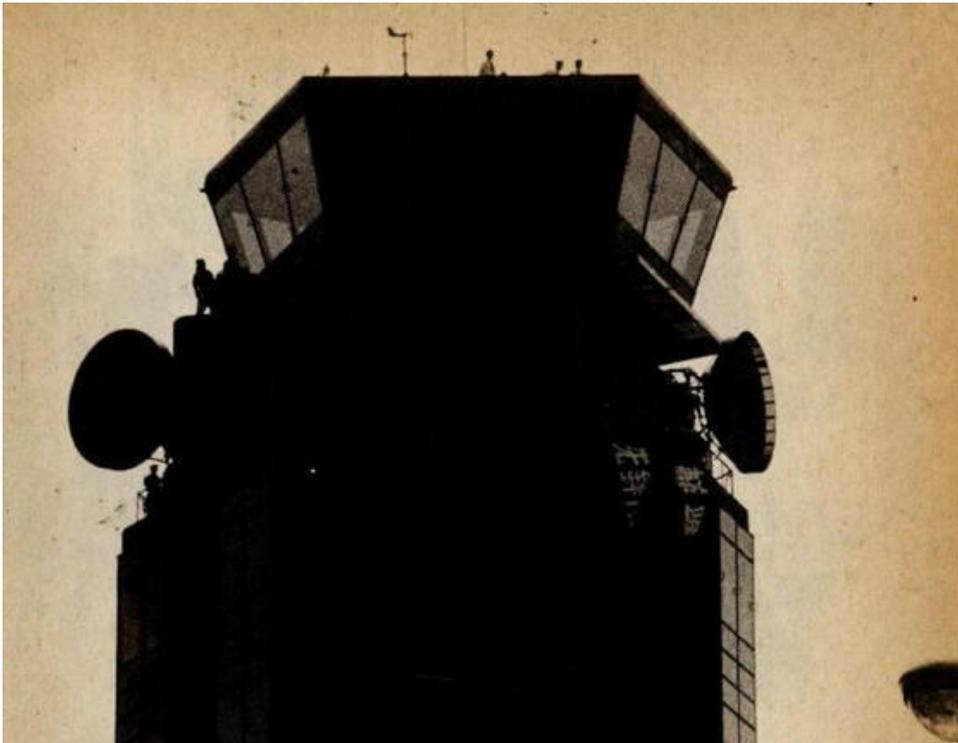
その3後編

今年は激動と変革の時代、1968年から50年目の年である。50周年を記念して集会や本の出版が企画されているが、もう一つ、1978年の成田空港管制塔占拠から40周年の年でもある。3月25日には、「三里塚管制塔占拠闘争40年 今こそ新たな世直しを！ 3・25」が御茶ノ水の連合会館で開催され、200名を超える参加者があった。

この管制塔占拠闘争に関わったH氏が、フェイスブックで『開港阻止決戦って何だったのよ、ドキュメント』と題した連載を掲載していたが、この連載記事を私のブログに転載させていただくことになった。今まで、管制塔占拠の前哨戦について2回掲載してきたが、今回は最終回の管制塔占拠闘争を掲載する。(転載にあたっては、H氏の了解を得ています。写真はブログ管理者の独断で選んだものを掲載しています。)

※ 3万字を超える長い原稿なので、ブログの字数制限を超えるため、昨日と今日の2回に分けて掲載しています。

【開港阻止決戦って何だったのよ、ドキュメント】その3後編



★管制塔占拠闘争(13)

太田はその「お椀」、パラボラアンテナの裏側に回り込み、14階外壁に取り付けてある鉄骨に足をかけました。彼のクライミングが始まり、パラボラアンテナのてっぺんに立ち上がりました。ここから16階管制室下部を巻いていた幅60センチメートルのキャットウォークに移ったのです。

この時、太田は中の人、管制官と目を合わせています。屋根のハッチから脱出しようとする管制官の最後の一人が脚立に乗っていたのです。彼は屋根に出て、脚立を引き上げていきました。彼らはよく自分の職場を守ろうとしました。15階扉に向けてできる限りのものを放り込んでバリケードにしていたのです。

管制室では、下から吹き上げてきたおそらくペンキに燃え移った火炎瓶の黒煙が流れ込み、管制官たちは避難しようとしていたのです。しかし、15階扉からではなく、中空のガラスの外から赤いヘルメットの男が覗き込んできたのです。

それは太田が、管制室への道を見出した瞬間でもありました。

管制室は五角形の枠にガラスが2重に張り巡らせて360度で空港内を見渡せるようになっていました。そのたぶん西側のパラボラアンテナ上部のキャットウォークに太田が現れ、やがて手にしたバールをガラスに打ち込み始めたのです。

太田ははじめパラボラアンテナ上のガラスにバールを打ち付けました。ぼよよーん、とガラスはたわみ、うまくガラスに入らなかったそうです。次は五角形の一つの枠部分に打ち付けます。食い込む手応えがありました。「ここがいける！」と思ったそうです。

そこを割りにかかりますが、実はその下には14階ベランダ扉を尻と背中を押さえ、足を突っ張っている者たちがありました。扉の向こうから、これもまた私達がついさっきまでやっていたようにハンマー状の物らしいものでぶっ叩く衝撃が伝わってきていました。

落ちてくるガラスに注意の声を上げると、太田は管理棟玄関側に移って、またガラスに挑み始めたのです。

狙うはもちろん角スミ。今度はキャットウォーク(パイプが何本か並んでいる構造)の隙間から60メートル

下が透けて見える場所です。足を滑らせれば、命がなくなるところで、彼は両手にバールを持ち、ガラスのヘリに突っ込んでいったのです。

小さな穴ができ、太田は馬手で棧の手がかりを掴んで身体をぶら下げ、弓手のバールを打ち付けて穴を広げていったのです。

恐ろしい男です。塔上の美少年です。熊本生まれです。

「いやあ、高所恐怖症なんだけど、あんときは怖いと思わなかったんだよね。ははは……」と本人は言うのでありますが。

どうやらこの時間あたりか、それより少し前らしいのですが、逆側のベランダに機動隊が一度、姿を現しています。逆側のやはりパラボラアンテナを備えるベランダにも占拠メンバーがいるのではないかとやってきたようなのです。

そちら側にどうやって行けるのか、私には確たることはいえません。たぶん 14 階のどこかの部屋を通って行った向こうに、同じような出口があったのだと思います。

さて、管制塔の五角形構造を思い出していただきたい。逆側のガラスが割りにかかられていても、機動隊がいた場からはそれが全くわからないのです。

一方、8 ゲートからやってくる大部隊は奇妙な動きを見せていました。

しずしずの進撃は相変わらずで、いくつものバリケードをラッセル車(トラックに鉄板が取り付けられている)を先頭で打ち払い、横の機動隊宿舎に火炎瓶を思いつきのように放り投げていました。上から見るにはまことに落ち着き払いすぎのように、休んだりちょっと進んだり、よう分からん(笑)。

そして、キャットウォークから太田が前田に声をかけます。

「あ、ここから入れますよ」。

★管制塔占拠闘争(14)

太田の「ここから入れますよ」の声に、前田は目の色を変えてパラボラアンテナを登り始めます。ガラスの穴は人が一人ずつ這いずりこむのにもう十分な大きさになっていました。けれども、そこに入るには胸まである 16 階の外壁を乗り越えなければならず、しかも、壁はちょうど登山というオーバーハング状。前田たちは、一瞬宙にのけぞるようにしてから穴に潜り込まなければなりません。

管制塔の屋根には、ハッチをあけて逃れた管制官が腹ばいになり、下の赤ヘルたちを覗き込んでおりました。彼らはまもなくやってくるヘリコプターによって吊り下げられるようにして救助されていきます。恐ろしかったと思います。

管制塔占拠組には「人質を取ってはならない」「民間人に怪我を負わせてはならない」という掟が課せられていました。彼らが管制室から私達との直の接触なしに、去ってくれる状況になったことは本当に天の助けでありました。

思い返せば、ここがいちばん難しく危機的な事態を招きかねない状態だったのです。混乱の中でどんな突発的なできごとが起こってもおかしくなかったのですから。高いところでのやりとり、万一のことが起こらないように、冷静さが求められていました。ドガチャガのさ中でも、占拠組の誰もがそこだけは果たすことができたとは言えます。

管制官たちに恐怖心を覚えさせたことにはまことに申し訳ないと思います。しかし、こうでもしなければ、無理やりな開港を阻止することはできないんだもん。

パラボラを鉄パイプで叩いていた小泉に、中路が「ここをやればいいだよ！」といいざま、持っていたハンマーでパラボラから 14 階の中に入っている細い管を叩いて落としました。バカバカしいほど手応えもなく、それは落ちたようです。

マイクロ通信室につながる導波管が断たれたされたのでした。自分でハンマーで壊したマイクロ通信室の機器に続いて、中路の仕事は丁寧すぎるのでありました。

中路が使ったハンマーを前田がパラボラアンテナの上から求めました。途中まで上って中路がそれを渡して、そのまま上へ向かおうとしました。

前田は非情なやつです。中路のヘルメットを踏んづけて(比喻だよ)、「下を守れ！」と厳命したのでした。プロ青の太田が開いたルートを通して、前田に戦旗派の現場リーダーだった水野が最上階へ続きました。ブントの看板しょってます。頼光に従う金太郎さんごときの兎島はこのときは少し遅れたようです。さきに大ハンマーだけが上に行っていたようなのです。

前夜、元気すぎるインターのメンバー(切込み隊、遊撃隊の隊長 2 人もいなくなっていたのです)が排水溝に入れなかったために、多くの任務を代わりに果たすことになった藤田が上がりました。そして、いまでも前田が「いつの間にか入り込んでしまった」という中川が地下足袋のアドバンテージによって、するすると上って行ってしまったのでした。

そのあとに平田が続こうとするのに、中路と小泉が腕をとって「待て待て」と引き戻します。前田の話によれば小泉だけは「俺たちは、ここで機動隊を止める。思う存分、上でやってくれ」とりっぱに答えたそうです。

最後に上っていったプロ青の中川は止められなくても、同じ党派の仲間なら止める。この微妙さがまだ初対面のような管制塔占拠組の関係が分かります。

こうして 14 階ベランダに残ることになったのは、インターの中路、小泉、平田、そして戦旗の若武者・山下でした。身体をくっつけて押さえ込んでいる扉は、ガンガンくる打撃の衝撃に代わって、やがてエンジンカッターの音と振動が伝わってくるようになりました。たぶん、ハンマーで殴りつけているうちに鍵がかかってしまったのだらうと思います。

2 本の大ハンマーによって、管制室の機器はまたたく間にガラクタになってしまいました。わずか 10 分ほどのことでした。壊したあとはすることもないし、群がってきたヘリに向かってミスターX(大物らしいと産経新聞で Wanted)はVサインあげて喜んでるし、破壊を免れたクリーム色の電話にかかってくれば「ただいま、占拠中！」と宣言するし、まもなく選抜野球中継を中断して始まった中継(ヘリが映していたのです)にその気になって、ハンマーを振るシルエットに面白がっているし、しょうがない奴らです。

管制室にかかってきた電話の一つはなかば涙声だったそうです。

「そこにあるのは大事な機械なんです。壊すのをやめてください……」。おそらく下の管理棟のどこかの階からだったでしょう。

答えの代わりは、破られた窓から春の風に乗ってどこまでも飛んでいく白い書類の群舞でした。



★管制塔占拠闘争(15)

占拠部隊が管制塔をよじ登り、管制室で「はつりだ、ワッショイ！」になっていくさまを現認したのは、横堀要塞に立てこもっていた仲間や周辺の小屋の人々、8ゲート前の赤い大隊でした。要塞では双眼鏡の中で繰り広げられていくスペクトルを機動隊に向かってマイクで実況中継をしていたといいます。一緒に立てこもっていた反対同盟の石井武さんに至っては、屋上の管制官がヘリに吊るされて去っていくのを、占

掘部隊が撤収していくものと思い「やろうら、えらい計画やったもんだ！」と感心していたそうです。

8 ゲート部隊はさらにおかしなことになっていきました。

14 階ベランダ組は管理棟屋上の機動隊の「降りてこい！」に「降りるために上ったんじゃねえ」や「降ろしてみろよ」なんて言いあいながら、8 ゲート部隊に手を振っていました。

実のところ、俺たちがもう仕事をすましてしまったのだから、わざわざ入ってくることはない、と内心では思っていました。しかし、手を振って彼らのやる気にまた火を着け、突入をさそってしまっているのも、その自分たちなのでした。8 ゲート部隊の指揮者は、現場の突き上げと無線で行なっている和多田たちとのやりとりの板挟みになっていたのです。

ここからは、いささか長いですが、この8 ゲートを前にした部隊の指揮者たちの話を写します。それにしても指揮者は辛うございます(笑)。

大森●管制塔に向かって「やったー！ よくやったぞー！」って、みんなが手をふっていた。

吉鶴●僕は管制塔部隊の作戦内容を知っていたから、「ああ、成功したんだ！」って、すぐにわかったけど、8ゲート部隊の圧倒的多数は、なぜ管制塔に赤旗が翻っているのかがわからない。僕は(前夜、管制塔に向かうマンホール入りに)失敗したメンバーとして、手をふりながら管制塔のちかくまで行こうとしたわけ。

大森●僕なんか、「先を越された」と、警察よりもショックを受けたりしてね(笑)。

大門●8ゲートまで行くしかないと思ったのは、われわれのスローガンが「包囲、突入、占拠」だったからです。8ゲートは占拠部隊ではないにしても、突入部隊だと本人たちは自覚していた。そして、さまざまな訓練を積んできた最精鋭だという自負もある。インターの場合、300人と数は多いが、2年間にわたって毎週、機動隊とぶつかった部隊だった。

佐々木●この300名は基本的に中隊、小隊として編成されていた。1小隊が10人程度で、5小隊で中隊となる。実際の戦闘ではあまり役に立たなかったけれども、一応はそのように編成されていたわけです。実戦では、小隊長が「突っこめ」という前に突っこんでしまったり、小隊長が1人で突っこんでいたり、バラバラですけどね(笑)。しかし、そのように編成されているのは、全員がコマンドとして自覚しているからです。

大館●希一さんか私だったのかは忘れたけど、プロ青、戦旗派の諸君といっしょにその場でアジったわけです。「管制塔に突入したのはわれわれの部隊である。今後とも闘争が続くことから、機動隊と白兵戦にならなくても、この場から引き返せ」と。本部からの無線指令で、そのようなアジテーションをしたと思うんです。それが、あとから、ものすごい批判をあげるようになった(笑)。

佐々木●トラックの荷台のうしろに立って、そのアジテーションをしたのは僕なんだよ。部隊は、これからどうしたらいいかわからなくて、茫然自失状態。行く気満々の連中だから、「帰るぞ」と言ったって聞く耳を持つはずがない。そこで、言葉を選んで「帰る」とは言わずに、方針提起をした。そうしたら僕のうしろで大館が「行くんだね、行っていいんだね」と無線連絡をしている。

大森●「行く」と決めるまで、5分ぐらいかかって、すでに3分の2くらいは引きはじめていたときだった。先鋒隊は「今日はパクられる」という覚悟をしていたから、「引くのかよー」と野次を飛ばしたわけ。ここまではわれわれの行動指導部がついていたから、「野次るな」と止められた。

大館●インターの内部からは、吉鶴君など管制塔に入れなかった人たち、それから小隊長、中隊長を含めて、「大館よ、ここまで来て、なんで帰るんだ！」と言いつづける。私は私で「これまで訓練を続けてきた2年間が、このままでは吹っ飛んでしまう」と感じて、本部に「行かせてくれ。このままでは現場がもたな

い」と連絡した。結論が出るまで5分間ぐらいかかったと思いますよ。その間ずうっと、希一さんがアジっていた。

大門●そのとき、私はもちろん「行くな」という指示を出していたのだけれど、「誰が行きたいと言っているのか」と大館君に聞いたら、「吉鶴たちだ」と言う。「車で突入する」という連中もいた。「最後は、収まらないから行かせるしかないか」と悩んでいたら、本部の誰かが「行くと全滅するぞ」と言ったが、「どこかで引かせるから」とゴーサインを出した。

大館●突っこんでいいという指令が出たときは、本当にうれしかった。自分たちは部隊を預かっているの、突っこまなかったら、どうなるのだろうと感じていたから……。

佐々木●「これで、プレッシャーから解放された」という感覚は非常に強かった。ただし、それまで撤収のアジテーションしていた僕は大変だったけど(笑)。「管制塔に突入した同志を迎えに行くぞー！」って、突然、アジの調子を変えたわけだから。

吉鶴●「本部から突入の指令が出た！」と誰かが言ったのを覚える。

佐々木●トラック周辺に詰め寄っている連中が、大声で「オー！」って、叫んだからね。

高橋●でも、決断までの5分間というのは、けっこう長く感じたなあ。もう赤旗が揚がっているの、本部に「どうするか」と聞こうとしたが、無線機の周波数がなかなか合わない。「管制塔が見えた。もう目的は達成した」とアジテーションをしているのに、中隊長の中には、そのような意志統一をしていない人もいて、「同志諸君、管制塔にはすでに突入した同志がいる。われわれが行かなくて、どうするのか」とアジっている(笑)。そうこうしているうちに、行くことになった。本人たちはコマンドのつもりだが、部隊の性格は大衆部隊で、とにかく機動隊とぶつかるという気持ちが強い。だから、隊長までは全体の陣形を心得ているが、それ以外の部分は前夜も当日の朝も、「武器がなくなるまで撤退しない。われわれが撤退するのは武器を全部使い切ったときだ」と、口々に決意表明しているわけです。電気銃だとか、新兵器もいろいろ準備していたので、「まだ何も使っていないじゃないか」ということになる。(『1978・3・26 NARITA』より)。

管制塔の上から見ていて、奇妙な動きをしていると感じたのは、こういうことだったのです。高いところから「来なくていい、来て欲しい気もする……」と、こちらも妙な気分なのです。さあ、♪入るの、退くの、どうするの？ はやく精神決めなさい、決めたら瓶持って走りなさい……、昔ながらのけしからん替え歌の、そのまた替え歌が心のうちで響くのでありました。

そして、一度、後ろに退いたようにみえた赤い隊列は、次の瞬間、怒濤のように押しかけてきました。あのラッセル車仕様トラックには、前夜、排水溝に入れなかった仲間が乗り込んでいることを、私達は知る由もありませんでした。



★管制塔占拠闘争(16)

三里塚第一公園では反対同盟主催の数千人がつどう集会が行われていました。

「いま、管制塔が占拠されています」と開始まもなく司会が伝えたようです。静かな声だったそうです。集会場は大歓声が上がりました。参加者に聞いた所によれば、「真ん中が凹んだ」とその時の印象を語りました。真ん中には、いつものように白ヘル、青ヘルの党派の大部隊が陣取っていたのです。真ん中が凹み、それを取り巻く人々が躍り上がって歓喜するという図だったようです。

反対同盟の青年行動隊は、この党派の大部隊を空港に向けようとしたようです。第3ゲートまですぐです。すでに管制塔が占拠され、管理棟にある警備本部は解体し、ただヘリコプターから、下の機動隊に声が飛ぶだけという警備の大混乱に乗じて、空港内に向かうことはそれほど困難ではないことは、少し経験を積んだ活動家であれば、すぐに分かることです。残念ながら、そこにいた党派部隊はまるで準備ができていなかったのです。

ブツの準備ではありません。やる気の準備です。

管制塔の上から、4000メートル滑走路に座り込んで行う大集会を見てみたかったです。管制塔占拠闘争がより大衆性をもったものに表現できていれば、その後の空港反対運動もまた違ったものになったでしょう。

東峰や横堀の反対同盟の人は、自宅方向へとって返した人が多かったようです。

「戦場はうちの方だ。ここじゃない」と、そのとき思ったと語ってくれた人がいました。この言葉もなかなか味わい深い。空港内に突入したとすれば、そっちの方向からだ、と感じ取っているのです。彼女は、帰ってくる8ゲート部隊をその後、自宅近くで迎えることになります。

さて、8ゲート。ここでは本部指揮者からのお許しを得て、部隊を突入させます。上から見てみると、トラックがゆっくりと跨線橋(東関東自動車道)の下をくぐり抜けてくるのが見えました。続く赤い大部隊は空港内の最初の交差点で機動隊残存部隊といったん対峙し、それから管制塔方向に一気に進み、機動隊との乱戦になりました。

火炎瓶が乱れ飛び、管制塔の上までパイプが盾にぶつかる音、機動隊がコンクリートを盾で打つ、乾いた軽い音……。何度も何度も、倒れて逮捕された仲間を奪い返し、また、闘いは続けられていました。胸を打たれるような光景でした。なぜか自分がこの高い所にいるのが場違いのような、下でともに肉弾戦をやらないことが申し訳ないような……。これもまたおかしな気分なのです。

前田が14階ベランダに降りてきて「上はもう全部、潰した。開港はできないよ」と伝えて、眼下の管制塔直下まで来た仲間の乱戦を見入っておりました。彼の片手は、ガラスで切ってゼッケンで縛ってあったのを、求められて平田が縛り直した記憶があります。

「(機動隊が)きたら、こいつでゴチン、とな」。相変わらず、ここを死守せよと言うのでありました。この14階では、いま抑えている扉がエンジンカッターで切り取られたときに、外と内からこの扉を巡る攻防になりそうでした。

例のトラックは管理棟の玄関の鉄扉に突撃したようです。警官隊が横隊をつくり、一斉射撃をしたのは、この直前だと思います。私達の進路を確保してくれた9ゲートのトラックもパトカーを追尾することで空港内に入ってきたのですが、射撃されるの感じてドライバーたちは首をすくめつつ突入してきたといいます。この日は、本当によく銃で撃たれています。なのに、どいつもこいつも命知らずになっていたのです。ひとりひとりの「兵隊さんたち」は、本気で私達管制塔組を連れて帰ろうと思っていたのでしょう。

吉鶴●僕なんか、「死んでもいい」と思っていた。

大森●整理してというと、全員が整列して「行くぞー！」と喚声をあげ、トラックが先発した。そのあとを部隊が進むが、機動隊はまだ出てこない。東関東自動車道のガード下をくぐると、その先に機動隊がちらちらと見え出した。インターの方が部隊も大きいし、経験もあったのだが、そのとき、インターと先鋒隊との間で話し合いがおこなわれた。「俺たちが先に突っこむ」と言ったら、インターが「どうぞ」と言ったような記憶がある(笑)。

それで突っこんだのだけど、ガードの坂道を上がったところがT字路になっていて、左側に放水車と機動隊の部隊がいた。こちらは火炎瓶を投げ、警察は放水する。そのように一進一退を繰り返していたら、機動隊が放水車を先頭にして、われわれに向かってきた。そして、インター、戦旗が合流して、全体でワーッと喚声を上げ、押しかえしたら機動隊が引きはじめた。分離帯の道路がある場所までは、こちらが攻める一方で、分離帯まで来て対峙関係に入った。

佐々木●躍り上がって、真上から鉄パイプで機動隊に立ち向かっている写真があるね。

大森●ああ！ この写真がそのときのものだ。分離帯の右側がインター、左側が先鋒隊。戦旗派はうしろでジグザグデモをやっていた。「おいおい、今日はちがうじゃないの」って言ったけど。そのあとはどんどん前に進めた。そのときの写真もあって、なぜかインターの隊列に1人だけで混じって僕が写ってるのがある(笑)。その日、戻ってきて、夜になって熱田さんの家に行ったら、インター現闘のT君が「テレビにぼつちり映っていたよ」と言われたが、それがこの場面。

大館●見る人が見れば、誰かを判別できるような鮮明さでテレビに映っていたらしい。

大森●このとき、インターが持っていたパイプは比較的軽いもので、それに比べると、先鋒隊のパイプは重かった。1回振り下ろすと、2回目は重くて腕が動かない(笑)。

高橋●あそこの場面はこちら側の完全制圧で、指揮をするなどという局面ではなかった。みんな、それぞれの判断で、楽しそうにやってるなというかんじで。僕は交差点に立って「やってる、やってる」と眺めていた(笑)。

大館●私の場合、見えたわけではないが、ピストルの音には驚かされた。

吉鶴●僕たちは、警備本部の建物に突っこんだでしょ。運転手の指示は、「突っこんだら荷台に火をつけて逃げろ」というものだった。運転席からうしろを振りかえると、指示どおり火をつけている。そこで残りの部隊に火炎瓶と鉄パイプを渡して、前に進むよう指示し、僕は最後にトラックを離れた。警備本部のある管理ビルからは、パンパンとピストルの弾が飛んでくる。僕はピストルを構えている警官から一番近い位置にいたから、何人かに狙われているのがわかった。

大森●どのくらいの距離だった？

吉鶴●20メートルくらいだったかな。警官はわれわれのいる方には出てこられない。柵の向こう側からピストルを発射していた。

佐々木●「あの銃口は俺を狙っている」というのが実感としてわかるんだよね。

吉鶴●狙っている警官に火炎瓶を投げたら、撃ち殺されるというかんじはあったね。僕は管理ビルから撤退する最後尾で、走って逃げたとき、福岡県警の3人組にタックルされて逮捕された。その時点で、8ゲート部隊の戦端は開始されたばかりだった。僕を逮捕した福岡県警は、あろうことか、われわれの部隊と機動隊の間に、弾除けとして僕を連れて行った。たしかに「死んでもいい」と覚悟していたけど、味方にやられるのはイヤだなあと思った(笑)。

大森●警官隊のピストル発射は、写真などで見ると片手撃ちだけど、僕の記憶では両手撃ちだった。ちょっと膠着状態になったあと、楯の前に出てきて、横一列の両手撃ち。でも、撃ちながら震えているのがよくわかった。一瞬、どうしようかと思ったが、意外と冷静だったな。

吉鶴●あのとき、プロ青でピストルの弾があたった人はいなかったのですか。

大森●下のコンクリートにあたった跳弾で、足を負傷したメンバーはいたね。

吉鶴●バイクヘルにあたり、着ていたヤッケに貫通した痕が残っていた人もいたみたい。

大森●前年の5・8で東山君がやられたときもそうだが、先鋒隊には「お約束」があった。誰かが前に出て両手を広げ、「撃てるものなら撃ってみろ」というパフォーマンスです。5・8のときには、まだバイクヘルを使用していなかったため、催涙弾の直撃で耳が切れたメンバーもいた。そこで僕も、3・26では「撃ってみろ」と前に出たら、最初は上向きに撃っていたのが水平撃ちになり、本当にピストルの弾が自分をめがけて飛んできた(笑)。

大館●ピストルを撃たれても誰もビビらなかつたのが不思議だね。

佐々木●17～18 発撃ったというのを聞いたことがある。

大門●放送局がテープを聞きなおして、何発発射したと教えてくれたね。

前田●「あのとき、ピストルにあたって死ぬやつがいなくて本当によかった」と後藤田正晴が述懐したということ、ある新聞記者から聞いたけど、「1人でも殺したら負けだぞ」というのが事前に後藤田が警備本部に指示した内容だったそうです。(『1978・3・26 NARITA』より)

空港内の8ゲート部隊は、30分ほどしてから撤収にかかりました。まだ機動隊とケンカしたがってなかなか退こうとしないメンバーを抱えて、まとめることに苦労したといいます。体力を使い果たした仲間が隊列から遅れ、数人が逮捕されていきました。

8ゲート部隊にとっては、いちばん難しい局面だと思ったのですが、上から見ている様子では、かなりうまくいったように見えました。

何しろ、ここでも機動隊の指揮命令系統がガタガタ、数も足りていなかったのだと思います。赤い塊が小走りに去っていくのを私達は見送りました。「パクられるな！」と念じつつ。

大門●機動隊が退路である丹波山に集まりだした。攻めてくる可能性があると思うから、こちらも構えながら撤退する。実際には、8ゲート突入部隊の被害はそれほど多くはない。ところが、千葉県警を中心とする横堀要塞方面の機動隊は無傷であり、陽動作戦で退路を守っていた部隊は弱かったから、ここで多くの逮捕者が出てしまった。

大館●警備本部がズタズタになっていることなど、現場は知りようがなかった。ヘリコプターで追跡されていて、われわれは絶対に機動隊に囲まれていると思っていたから、走って一目散に逃げるのではなく、構えつつ撤退というかんじ。撤退するときの機動隊の動きも遅かった。

大森●部隊に襲いかかって逮捕するのではなくて、空港の外に押し出すという動きだった。

大門●警察無線は入らず、頼りは部隊の無線だけなのだけど、その部隊がまとまっていない。退路の途中にいくつか砂利山があり、そこにさしかかると、的確に情報を伝えてきたホテル最上階のメンバーや横堀要塞からも見えなくなる。また、無線でつながっている部隊は、全体が見えないから自分たちのことだけを伝えてくる。そうすると頼りになるのはテレビだけという状況になった。

高橋●大館君が言うように、包囲されていると思っていたから、じりじりと撤退していった。だから、とても長く感じられたな。(『1978.3.26NARITA』より)

おそらく15分位はたつてからだと思います。10数台のかまぼこ(機動隊バス)が整列し、サイレントともに赤い塊を追っていきました。ここでも数を用意していなかった機動隊は、体制を整えるのが遅れ、8ゲート部隊を空港からなるだけ遠くへ追い出していく、という方針だったようにみえます。

この原稿を書いている時、昔の仲間がおしえてくれました。空港内の戦闘で逮捕される仲間はある程度、覚悟のうえです。彼らが戻ってくる退路を確保し続けた仲間にも逮捕者を出していました。

『松翁交差点から東峰方面に位置した第三大隊、そして予備部隊のはずの第四大隊、そこに含まれた看護小隊の女性たちから多くの逮捕者を出したと記憶しています。』

彼女たちの献身的な行動を忘れるわけにはいきません。そういえば、のちに東京拘置所で手紙でやりとりをした女性たちに「横堀退却被告グループ」から「横堀凱旋被告グループ」と名称を変更した人たちがいたはず。このグループだったのでしょうか。

多くの逮捕者を出した反省から、5月の開港阻止闘争のときには、看護隊は屈強な男たちで編成されることになったとも聞きました。その後の彼女たちの生き方を左右したのですから、けっして小さくない失敗でした。

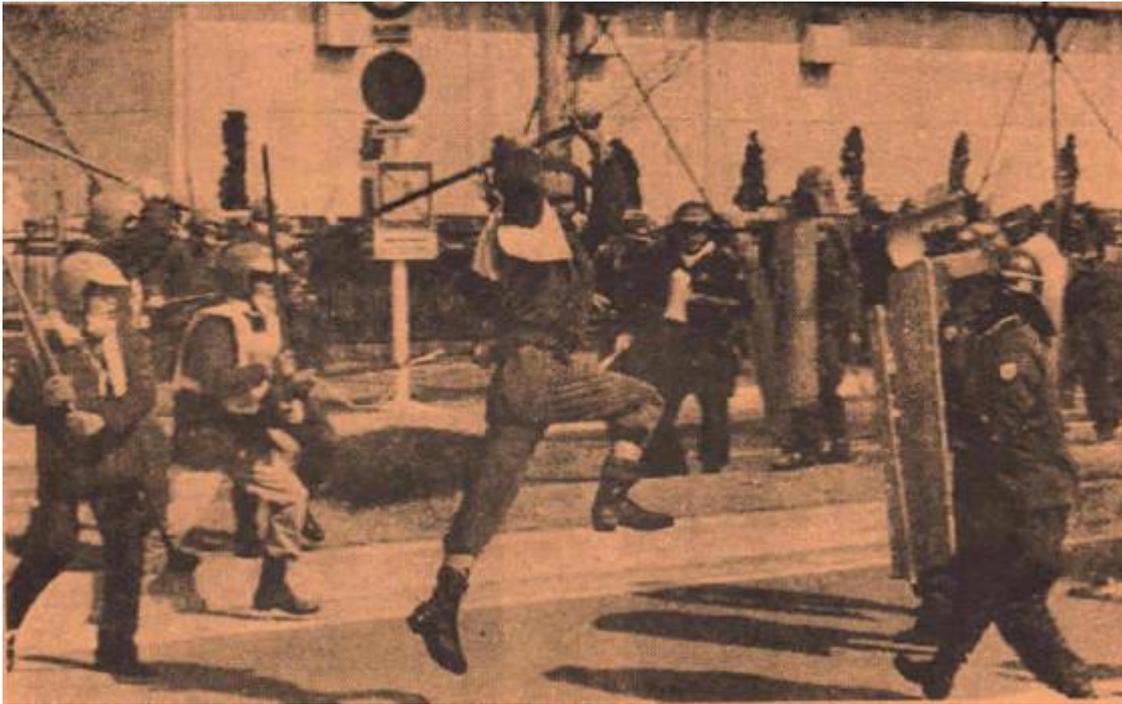
さて、この日のことをある雑誌で回想した機動隊員が、8ゲート部隊について語ったことがありました。「向かってくる連中の目がキラキラと輝いて、どうしてこいつらは、こんなに懸命にできるのだろうかと思ってしまった」と。

8ゲート部隊を見送った管制塔組の闘いは、いま少し続くことになります。

中川は管制室から見た光景を語ります。

「労農合宿所の屋根の上ではこちらの方を双眼鏡で見ながら手を振っている仲間の姿、プロ青小屋の横ではマル機の報復襲撃に備えた鉄パイプ部隊、第一公園を出発したデモ部隊だろうか？フェンスの土手から上がる煙……。」

あくまで青く晴れ上がった空のもと、高いところでは春の風が少し冷たくなってきていました。



★管制塔占拠闘争(17)

8ゲート部隊は去っていきました。16階管制室では壊す機器がもう何も残っていませんでした。壊した機器類は15階扉に向かって転がし落とします。机や椅子、しまいには冷蔵庫まで。階段通路が埋め尽くされるまでそう時間はかかりませんでした。ガラスにてんでにスローガンを書いたり、紙で作ったツチカマを貼り付けたりしていました。

「あとは逮捕されるだけだなあ」。太田が外を見ながら気の抜けたセリフを吐きました。伸びやかに広がるうらかな北総台地に、ところどころ闘いの煙が上っていました。東には赤旗を身にまとった横堀要塞、西には滑走路を挟んで三里塚公園。何かもう静かにのどかに存在するようです。

太田達の「平和」はもちろん長くは続きませんでした。機動隊が15階の扉を開けて突入の構えを見せるようになります。

カケヤでそのバリケードを崩しにかかったところに、兎島と水野が消火栓からホースを引きずり出して水をかけました。「ガソリンだあ」の声とともに、機動隊は音を立てて後退。また、恐る恐る階段を上ってくるのに、水野が手にした消化器で消火剤を噴霧する。

階段の上と下で対峙しているうちに、東側のベランダに機動隊が姿をみせます。ガラス越しのにらみ合い。てんでに書かれていた落書きに前田がまた新しいものを加えます。「入ってきちゃ危ないよ」。

ガラスにガス銃で穴を開け、そこからガス弾を打ち込みました。拾って投げ返していましたが、次々にやっ

てくる催涙ガスで6人は涙と鼻水まみれ。ガス銃と大鎚で開けられた穴から突入してきた機動隊員に、6人は肩を組んでインタナショナルを歌いながら逮捕されました。感情を表に出すことのない児島が、生まれて初めて感極まってとめどなく涙を流したといえます。

14階ベランダ組は、頭上からガラス片が落ちてくるまで、16階が制圧されたことに気づきませんでした。「こっちのガラスを割るんじゃないよ！」と、見上げた先に機動隊員が顔をのぞかせていました。「あら、ま」という感じです。

この機動隊指揮者は、キャットウォークを回り込んでくる機動隊員に向かって、「そこにいられなくしなきゃダメだ。水をかけろ！」と喚くのです。でも、上が制圧されたのなら、別にここで頑張る必要もない。

「インターうたうか」と平田は仲間にも声をかけ、押さえていた扉を離れて仲間と密集します。当時の「お約束」だったのでしょうか。上も下も同じことをやっていたのです。密集するのは、たぶん暴行に耐えるためでもあったでしょう。でも、たしかに組む前に4人とも笑い合っていた記憶があります。やることはやった。これから耐える時間のはじまりなのです。

上からと扉を開いて出てくる機動隊員にほとんど同時に組み付かれ、多少の打撃、引き剥がしにあつて、逮捕時間を確認する声とともに14階組の闘いはあつげなく終了しました。平田の後ろ手錠と、唇にケガを負わせたあの指揮者が気に入りませんが、いや、いま思えば彼が逮捕時刻を確認しているとする、殴りつけてきた機動隊員は別人ということになるのでしょうか。40年もたったことだし、恩讐を越えて裁判以来の再会と交歓などできればいいと存じます。第7機動隊たぶん小隊長のMさん。嫌味でなくそう思います。Mさんは、地上まで連行しながら「何がいやだって、瓶がガシャッと割れる音がいちばん嫌だ」や「もたもたしてっから、入られちゃうんだ」のまことに俗な、しかし人の悪くないセリフを連発しておられました。

下には逮捕された仲間がずらりと列を作っていました。三脚ずつ置かれたパイプ椅子に両側を機動隊員に挟まれて座らされ、臨時の取調室に向かって少しずつ進むのです。なぜかそこで弁当が出され、くだんのMさんは「俺たちより、いい弁当じゃねえか」と覗き込むのです。これも不思議です。きっとどこかの機動隊員用に準備されたのが、出されたのだと思うのです。こんなサービスがあるとは思ってもよらず、遠慮なくいただいたのですが、バカやろ～、さっき切った唇が腫れるわ、血が流れるわ、食いつらいじゃないか。

取調室には仲間が溢れかえっていました。正面に前夜、排水溝入り口で別れてしまった仲間を見たときには、我知らず目を剥いていたと思います。この連載で何度も出てきている吉鶴君でした。前夜の恨みを晴らさんと、8ゲート部隊に合流してトラックに乗り込み、がんとして突入を主張してやまず、あげくに機動隊員によって、タマ(火炎瓶)よけにされたという男でした。

彼が管制塔部隊の遊撃リーダーだったはずで、ひょっとして、反対同盟旗とツチカマ旗を腹に巻いていたのじゃあるまいか。

まだ、おりました。九大のNくんもそこにいて、足を引きずりながら連行されてきました。彼は10数人分の鉄パイプを私と一緒に抱えて田んぼの畦に足を突っ込みながら運んだ仲間でした。引きずっていた足は銃弾によるものでした。そして、また『三里塚のイカロス』上映の初日に来てくれていた大貫くん。彼は私が所属していた切り込み隊のリーダーだったのです。そいつらが目の前に次々に現れました。なんと律儀な命知らずたち。いいやつらでした。

8ゲート組はケガ人多数。ぼろぼろになりながら、けれど、どいつもこいつも誇り高い顔をしておりました。新山たちの9ゲート組はそこにはたぶんいなかったと思います。新山くんにはあの私達の突入時に管理棟前ですれ違ったまま、会えなくなりました。

こうして1978年3月26日の空港内の闘いは終わりました。(横堀要塞の闘いはこれよりもう少し続きまし

た)。この日から管制塔組は4年～11年の拘留と懲役の獄中ぐらしが始まりました。私の感覚ではそれはまた別の物語の始まりでした。

長期の獄ぐらしはみなさんに応援してもらったおかげで、本人たちはわりに幸せに過ごしたといえます。家族のほうが一番辛い年月だったというのが掛け値なしの事実です。

しかも、この日の闘いと長い拘留で、二人の仲間の命をなくしました。9ゲートで身を焼いた新山幸男は2ヶ月半後に辛い治療のうちに逝き、4年後には管制塔組の原勲が保釈直後の拘禁症の激発で自殺し、私達の人生の中にその命を生かすしかない存在になりました。ひょっとしたら、終わりがないのかもしれない過程を、管制塔メンバーは歩いているのかもしれませんが。それはそれぞれの生き方、構え方なので、あえてことあらためて言う必要もない話です。

平田個人は進むことの難しい道であっても、そして、ふりかえってもみても恥多き道でありましたが、足踏みしながらでも、相変わらず「来たる日」に向けて、生きるしかないと考えています。

「池の柳が芽吹いた。今年は寒かったのに春はまたやってきた。

その足にももの言わせて走れと言って聞かせたのに、逃げる気のないおまえのこと、かくなるうへは、立ったり、しゃがんだり、足踏みしたりして来たる日に備えよ。

母より」

管制塔占拠から40年。せいっぱいの虚勢をはって伝えてきたメッセージに、わたしはまだ応えられていません。このメッセージは、あの時代のまっとうな人々に共通する思いであったと思います。であれば、懐古談ではなく、通ってきた道を見直し、少しはましな「教訓」のようなものを汲み取る努力をしなければ、みなみなさまに申し訳がたちませぬ。それを見つけ出す契機は、きっとまだ多く埋もれたままなのです。

『開港阻止決戦って何だったのよ、ドキュメント』はそんな大それた「見つけ出す契機」の役にはとても立ちそうもありません。それでも、試みの前提として、事実を確かめおく「実録」はあったほうがいい。ここに記録した人間や、組織のありようを、立ち戻ってもう一度、考えてみる際の参考にできますれば、という思いです。

その試みをこのページにこのまま続けて記していくかどうか、みなさんの意見を聞いて決めたいと存じます。

(終)

※ 管制塔占拠闘争を報じた第四インター機関紙「世界革命」号外(1978.3.27)をホームページにアップしました。

下記アドレスからご覧ください。

<http://www.geocities.jp/meidai1970/kikanshi.html>